信者の親睦季刊誌

教会設立

三十周年記念

385

昭和四十年十二月

住吉カトリック教会

住吉カトリック教会

創立三十周年記念

特集号

目次

三十年の歩み …… 2
歴任表 …… 5
三十周年のことば …… ベロー神父 7
その昔を語る（三十周年記念座談会） …… 8
神戸カトリック教会小史 …… 腰高輝次 20
神戸カトリック教会年譜 …… 34
住吉の思い出 …… ベロー神父 36
住吉教会と私　思い出すまゝに …… デーラ神父 39
留守番神父から …… モリス・デュセン神父 43
住吉での私の踏み出し　過去を顧みて …… モラ神父 45
思い出 …… 和田マリア 47
住吉教会での思い出 …… 松本錦治 48
想い出すことども …… 難波仁 50
司祭になる喜びを皆様と共に …… 和田幹男 53
王たるキリストの聖心の愛に於て …… 伊藤綾子 56
住吉教会出身の聖職者 …… 58
住吉教会のアクション活動 …… 59
婦人会の歴史 …… 60
住吉教会青年運動の変遷 …… 62
レジオ・マリエの歴史 …… 69
編輯のあとに …… 71

住吉カトリック教会

三十年の歩み

昭和十年五月五日　兵庫県武庫郡御影町申御田九三二番の一に仮教会設置、主任司祭メルシエ神父。

昭和十一年五月　兵庫県武庫郡住吉村丸の後一一三四番地に本教会一二五八坪購入。

七月　司祭館着工、つづいて日本式聖堂も着工。

十二月十三日　聖堂及び司祭館共竣工し、献堂、祝別式挙行。

昭和十二年九月　主任メルシエ神父は夙川教会に転出され、大阪田辺教会よりデーラ神父主任として着任。

昭和十三年三月　デーラ神父再び田辺教会へ。代つて鷹取教会よりモラ神父来任。

同　年七月五日　神戸地方大水害にて住吉川氾濫し土砂流入し教会内を埋めつくす。

昭和十四年九月　モラ神父東京へ転出され、代つて川口教会よりピロース神父来任さる。

昭和十六年二月　田口司教叙階され、新大阪司教となり、カスタニエ司教は隠退、住吉教会の主任として来任される。

昭和十八年三月　ピロース師は助任となられる。

カスタニエ司教死去される。主任はピロース神父、助任は西村神父となる。西村神父は召集となつたため、代つて再びデーラ神父主任となつて来任、ピロース師は老齢のため助任となる。

昭和二十年八月六日　神戸空襲にて、聖堂炎上焼失、よつて伝道館を仮聖堂としてその後ミサを執行する。

昭和二十四年八月十四日　住吉教会創立当初より伝道士として活動された和田実氏病を得て死去される。遺族夫人和田マリヤさん及び遺児幹男さんは大阪へ。後任として和田保子さん着任さる。

昭和二十五年六月　デーラ神父休暇を得て一時フランスに帰国され、次いでジュッセン神父主任として来任さる。

昭和二十五年十一月　助任ビロース神父は老衰のため死去される。
昭和二十六年　二月　ジュッセン神父休暇のため一時フランスに帰へられ、代つてベロー神父主任となられる。
昭和二十七年　神戸市の都市計画のため、教会の北と東及び南側の道路拡張のため教会敷地収用され、その代償として西側に稍々広げられたが全体として可なりの縮少を余儀なくされる。そのため伝道士宅、仮聖堂は移転させられ、正門も従来東側にあつたものが北側に変更される。
昭和二十七年　十月　教会内西側壁の部に庭師の手にてルルド洞窟を建設、エルベ神父の手にて祝別式を行う。
昭和二十八年　九月　台風十三号神戸を襲い、ために仮聖堂は無残にも屋根を飛ばされて大損害、使用不能となつたため、爾後司祭館にてミサを執行される。
十二月　信者一同協力して聖堂復興再建に着手、かねて計画のあつた幼稚園を早急に開設することとし、九月に着工、十二月には幼稚園建物木造平家建四室一棟を竣工、祝別式挙行。建物を一応聖堂としても使用することになる。
昭和二十九年　四月　幼稚園は星の園幼稚園と命名して開園。
六月　帰仏中大病を患らわれたデーラー神父病気恢復し無事神戸に帰へられ、住吉教会主任となられる。
昭和　三十年　四月　ベロー神父助任。
幼稚園遊戯室を増築して竣工。
昭和三十一年十一月　伝道婦和田保子さん辞任、新たに原田すさ子さん着任。
十二月　デーラ神父東京へ転任され、代つてメルシエ神父三田教会より主任として来任される。
仮聖堂のあつた場所に新聖堂目出度く竣工、献堂式を挙行。
昭和三十三年　六月　教皇庁公使フルステンベルグ大司教住吉教会御訪問。
十月　デーラー神父東京より帰任され、助任となられる。
昭和三十四年　五月　メルシエ神父休暇にてフランスへ一時帰国さる。

昭和三十五年　二　月　メルシエ神父神戸に帰任、住吉へ。

四　月　ベロー神父休暇にて一時フランスへ帰国される。

十一月十三日　住吉教会創立二十五周年の祝賀式、西村副司教のミサ、祝賀パーテイ、運動会を催す。

十二月　ベロー神父帰仏されていたが無事神戸住吉に帰任。

昭和三十六年七月二十二日　創立二十五周年記念行事の一つとして信者の親睦バスツアーを催し、立杭の陶器見学と東条湖へ、参加者九十名。

昭和三十七年五月二十九日　日本二十六聖人聖跡巡礼団一行二十六人を住吉教会に迎える。

昭和二十七年　六　月　十　日　聖パウロ三木列聖百年祭記念祝賀会を開く。ミサ後パーテイにて田川初治氏の講演をきく。

昭和三十八年　三　月十四日　デーラ神父二回目の休暇にてＭＭ汽船カンボジア号にてフランスへ帰られる。

九月二十九日　信者の親睦を目的とする第二回バスツアー開催、北摂のキリシタン遺跡地の見学に行く、参加一〇〇名。

十一月二十八日　帰仏中のデーラ神父元気に住吉に帰任される。

昭和三十九年　八　月　聖パウロ三木館着工。

十二月二十日　聖パウロ三木館竣工、祝別式挙行。

昭和　四　十年　三　月　七　日　星の園幼稚園創立十周年祝賀会を盛大に挙行。

三　月　八　日　住吉教会創立以来千人目の洗礼が授けられた、受洗したのは中里裕記さんという幼児。

四　月　十　日　住吉教会聖堂が少しく狭くなったので前面入口の部分を東へ拡張する増築工事を始めたが、これが竣工した。

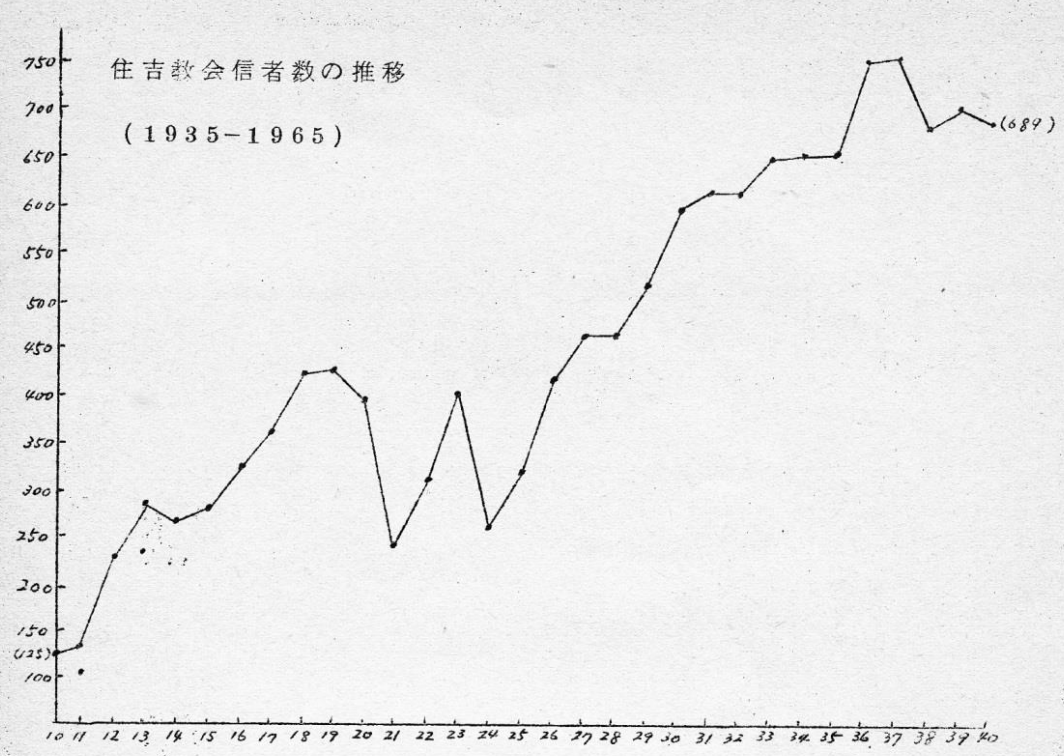
五　月三十日　聖パウロ三木館の新築完成と聖堂の増築工事完了を視察するために田口司教公式に訪問される。

住吉教会主任司祭。助任司祭

歴任表

年次	主任司祭	助任司祭
昭和十年	メルシエ神父	
昭和十一年	メルシエ神父	
昭和十二年	メルシエ神父	
昭和十三年	デーラ神父	
昭和十四年	モラ神父	
昭和十五年	ビロース神父	
昭和十六年	カスタニエ司教	ビロース神父
昭和十七年	カスタニエ司教	ビロース神父。西村神父
昭和十八年	カスタニエ司教	ビロース神父。西村神父
昭和十九年	デーラ神父	ビロース神父。西村神父
昭和二十年	デーラ神父	ビロース神父。西村神父
昭和二十一年	デーラ神父	ビロース神父
昭和二十二年	デーラ神父	ビロース神父
昭和二十三年	デーラ神父	ビロース神父
昭和二十四年	デーラ神父	ビロース神父
昭和二十五年	デーラ神父	ビロース神父

年次	主任司祭	助任司祭
昭和二十五年	ジュッセン神父	
昭和二十六年	ジュッセン神父	
昭和二十七年	ベロー神父	
昭和二十八年	ベロー神父	
昭和二十九年	ベロー神父	
昭和三十年	デーラ神父	
昭和三十一年	デーラ神父	ベロー神父
昭和三十二年	メルシエ神父	ベロー神父
昭和三十三年	メルシエ神父	デーラ神父。ベロー神父
昭和三十四年	メルシエ神父	デーラ神父。ベロー神父
昭和三十五年	メルシエ神父	デーラ神父。ベロー神父
昭和三十六年	メルシエ神父	デーラ神父。ベロー神父
昭和三十七年	ベロー神父	デーラ神父。コーナン神父
昭和三十八年	ベロー神父	デーラ神父。コーナン神父
昭和三十九年	ベロー神父	デーラ神父。コーナン神父
昭和四十年	ベロー神父	デーラ神父



住吉教会信者数の推移と毎年の受洗者数

年　次	信者数	洗礼数	年　次	信者数	洗礼数
昭和10年(最初)	116	1	昭和26年	431	32
11	130	15	27	471	9
12	229	25	28	522	16
13	291	19	29	518	19
14	278	19	30	607	21
15	296	2	31	628	18
16	332	22	32	626	28
17	336	15	33	650	29
18	425	21	34	653	29
19	424	16	35	655	16
20	382	15	36	766	31
21	229	9	37	770	20
22	320	5	38	686	25
23	410	15	39	701	15
24	269	33	40		20
25	379	29			

三十周年のことば

主任司祭　ベロー神父

私達の住吉教会が今年で創立三十周年を迎えました事は大変うれしいことで、私は皆さんと共に心からおよろこび申上げ度いと思います。最初カスタニエ司教様の卓絶したお考へから、この住吉に教会をつくるということをお決めになつたのですが、何んと言つても初代の主任神父であつたメルシエ神父様の御苦労は大変だつたと思います。又代々の主任神父様も非常な御努力をつゞけて下さつて、今日の教会の姿にまで成長させていただいたわけでこれらの神父様に対しては心から御礼を申し度いと存じます。それに又信者の皆さんの御協力も又忘れることの出来ぬ賜物でほんとにうれしいことです。他の教会とちがつてこの住吉教会は三十年の間にほんとにいろいろな災害に会つて来ました。まづ第一が昭和十三年の大水害による被害ですが、この時はモラ神父様が御苦労なさいました。次ぎが戦争で折角立派に出来ていた聖堂が焼けてしまつたことで、これはデーラ神父様が全く命がけでこの教会を守つて下さつたのです。それから三番目の災害は、これは私が在任していました時、即ち昭和二十八年に台風十三号が吹き荒れて、忽まちの内は聖堂の屋根が吹き飛ばされ、見るも無残な姿に損壊してしまつた事でした。而しその都度に信者の皆さんは大変な努力をして、物質的にも、精神的にも力が力を合わせて、復興をして下さつたことはほんとに感謝に堪えない所です。今日では皆様の御尽力によつて聖堂も新しく出来ましたし、又聖パウロ三木館も立派なものが建つて信者の親睦その他行事のために使用されるようになりました。その上すでに十年も前から、星の園幼稚園が教会の内に建設されまして年毎に盛大になつて行き一一〇名もの園児を収容出来るようになりました。最初一一〇名に過ぎなかつた信者の数も今では七〇〇名を越すほどの神戸でも屈指の大教会となつてまいりました。皆様の力に感謝すると同時に又神様の御恵みにも深く感謝したいと存じます。私達の住吉教会は日本の聖人「聖パウロ三木」に献げられ、その御保護をいただいている名誉ある教会です。今後共、この聖人の導きをお願いして、次の四十周年、五十周年を迎えました時は、更にもつと、もつと立派な教会になりますように皆さまの御協力をお願いしたいと存じます。

30周年記念座談会

その昔を語る

昭和四十年十月二十四日

住吉教会聖パウロ三木館にて

（順序不同）
（敬称略）

住吉教会創立者	アレキシス。メルシエ神父
在任期間最長の主任司祭	ヨゼフ。デーラ神父
ヨゼフ会員	千葉健吉
婦人会員	武田綾子
同右	山邑美重子
同右	神沢いと
同右	川端シズエ
同右	尾形竜子
同右	中里矢須子
同右	安田久代
同右	五十嵐喜世子
元住吉教会司祭館付	真浦みね
伝道婦	原田すさ子
司会。（ヨゼフ会員）	腰高輝次

御影に教会を初めた当時

司会者―今年が丁度住吉教会創立三十周年に当りますので、この機会に住吉教会の歴史を残すという意味で、古い信者の方のお集りを願い、それぞれ、思い出話をしていたゞき、その記録を止めるために今日の催しとなつたわけで、皆さんにはお忙しい所、御出席下さいまして感謝に堪えません。それでは順序として、教会創立の以前のことから、切り出して、まずメルシエ神父様から御願いしたいと思います。

メルシエ神父―私は住吉教会創立当時の主任神父だつたということで今日お招きをうけたのだと思います。その当時私は日本に来て五年目で、日本語の勉強も済み、奈良の教会に居りました所或る日カスタニエ司教様から手紙をいたゞいたんです。（その手紙を懐中から取り出しつゝ見せながら）これですがね、これは私に対する任命書でした。日付は一九三四年十一月二十二日で、中には『あなたは十一月一杯で奈良教会を辞めて、神戸の東の方、御影の方面に新しい教会を建てる準備をしなさい』と書いてあるんです。そして『そのために神戸の下山手教会に席を移して機会を待つように』とありましたので、十二月から下山手教会に移りました。その時下山手ではペリン神父さんが主任、山中神父さんと、それに竹野神父さん（後に病死されました。）に私と、三人の助任が一緒に暮しました。私は司教様の命令で御影の方面に教会の場所をさがすために、伝道婦の木元章さんと一緒に毎日のように神戸の東部を歩き廻つていましたが、或る日木元さんが御影にとてもよい家をさがしてくれたんです。それが申御田九三二番地の日本家で、二階建一寸した広さもあり、庭もあつて大変いゝ感じでしたので早速それを手に入れて、教会を始めることにいたしました。これが御影の教会、つまり今の住吉教会の前身の発祥です。場所は阪神電車御影の駅の北約一〇〇米上つた所の東側、野村医院の東隣りでした。場所を探し始めてから丁度六ヶ月目で、私がそこに引越したのは一九三五年の五月五日でしたから、この日が住吉教会小教区が創立された日です。

司会者―すると住吉教会は下山手教会から分れて独立した教会ということになりますか。

メルシエ神父―そうです。大部分は下山手教会の地域でしたが東の方は一部夙川教会の地域も入つて来ています。多分東は本山村までだつたと思います。

山邑美重子―たしかそうでしよう。私もその頃芦屋川の上の方に住んでいましたが住吉教会ではなしに、ずつと夙川の教会に行つていましたから。―

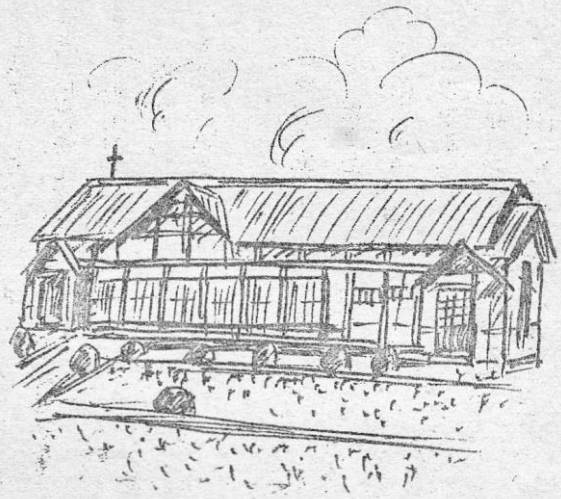
司会者―御影の教会が出来た時にすでに附近に住んで居られた信者さんも相当あつたわけでしよう。

メルシエ神父―こゝに居る神沢さん、中里さん、川端さんなど皆そうでしよう。

神沢いと―私はさつき言われた野村医院につとめていましたから、丁度教会の隣りになるわけで、大変便利でうれしゆうございました。

司会者―飯島幡司先生の一家も昔、御影に住んで居られた事を私は記憶していますがそれは当時よりもずつと前だつたかも知れません。草創の時代に神父様もずい分と苦労なさつたんでしようね。

メルシエ神父―私は御影教会を始める時に布教伝道のためには優秀な伝道士が是非必要だと感じていましたので、早い目にさがすために鷹取のジュビア神父様に相談していました所、丁度よい方があつたんです。それが和田実さんでした。和田さんは当時、鷹取教会に所属していましたが、私はかねて伝道士にはぜひ高等教育を受けた人をと望んでいましたので毎日、マリア様によい伝道士を与えられますように祈つていたんです。するとこれに対して丁度ピッタリの人で大阪の外語を出てフランス語もよく出来る方でしたが只、病身でして、私の要求にも一日に一時間位の手伝いならいたしましようとの事だつたんです。



戦災で焼失した
最初の聖堂

それで承諾して来てもらつたのが二月十一日の聖マリアのルルド御出現の祝日で、私は優秀な伝道士を与えられたのもマリア様の御かげだと今だに忘れません。その後も和田実さんはほんとによ

く働いて下さいましたが残念な事に昭和二十四年八月とうとう亡くなられました。

司会者―その当時の信者の数は？

メルシエ神父―ざつと百二十人位だつたと思います。その時の人は今でも住吉に沢山居られますね。今日もこゝに居られる方々皆熱心でした。中村さんの姉妹が公教要理の御手伝いや、聖歌のオルガンをやつて下さつてましたし、聖歌は村上義夫さんが力を入れて下さいました。

山邑美重子―中村さんのお姉さんの文子さんとは私、聖心女子学院で同級でした。住吉でお働きになつてから間もなく修道院に入られましたが熱心なお方で、今でもなつかしく思つています。

デーラー神父―こゝに居られる尾形竜子さんはその妹さんですね。

司会者―そうですね。私も不思議なご縁であの方が信者になられる以前、古い昔の事ですが中村さんのお家とは、隣り同志だつた関係で大変心安くしていたゞきました。又村上義夫さんは今は山崎の方に居られるそうですが、とてもいゝバスで歌つていたことは印象的でしたね。あの方の妹さんも修道院に入られましたね。

住吉へ移転して

司会者―ところで御影申御田の仮教会から翌年には今の場所に教会が移つたわけですが、その土地はどんな状態だつたんですか。

メルシエ神父―その時こゝは勿論畑で、玉葱が植えられていましたね。附近には家は殆んど少く畑ばかりでした。どうしてこゝに決めたかつて？。それは司教様が決められたんで、多分安かつたからでしよう（笑）。広さは約千二百坪でした。

デーラー神父―東側の道の所には川が流れていましたね。ウソ川といつてたでしよ。

千葉健吉―そうです。今はなくなつてしまつたが、―私は元来がこの土地で生れた者でよく知つています。子供の時分にこの川によくメダカやエビを取りに行つたものでした。その時から思うと、この辺もすつかり変つてしまつたものです。

メルシエ神父―それで新しい教会の場所も決まりましたので早速建築にかゝつたわけですが、着工したのは昭和十一年七月で五ケ月かゝつて出来ましたのは十二月でした。カスタニエ司教様が来て下さつて献堂式を挙げたのは十二月十三日です。その時の建物は聖堂、司祭館、伝道士の家でいづれも木造。司祭館だけは外部モルタル張りでしたが、それは今でもそのまゝ残つている姿の通りでした。

デーラー神父―土地はたしかに広かつたんです。今の状態では約七百坪になつていますがそれは戦後の区画整理で縮められたんです。その時は北側も今よりは約五米位東側も約五米ほど広く、南側はもつと広く二十米ほども広かつたでしよう。それで教会の土地は今見ますと北半分と南半分とでは丁度司祭館と幼稚園遊戯場との間で一つの段になつてますね、あのような段がもう一つ幼稚園運動場の南の部分にあつて全体が三段になつていました。それがなぜ消えてなくなつたかと言いますと、昭和十三年の水害で住吉川の土砂が流れこんで埋めてしまつたからです。ですから、今の教会の土地は昔の畑の土の上に北の方で約五寸、南の方では三尺位の砂がかぶつてしまつて、それだけ高くなつたわけですね。カスタニエ司教様は後で言つていましたよ ― ただで地上げが出来てもうけたとね（笑）

司会者―最初のおみ堂はどの位の広さでしたか。

メルシエ神父―畳敷きで五十畳位だつたでしよう、北側には廊下がありまして襖の仕切り、祭壇は西の方で入口は東の方になつて居り、北から入つたものです、祭壇正面には聖パウロ三木の画像をかゝげていました。

司会者―このおみ堂が聖パウロ三木にさゝげられたというのは何にか特別のいわれがあつたんですか。

メルシエ神父―特別の理由はありません。たゞ日本の聖人にさゝげたみ堂が大阪の関目の教会以外になかつたものですから、私はこの機会に日本人信者のためと思つて聖パウロ三木と考えたわけで、司教様もこれには喜んで賛成して下さつたんで、これに決まつたのです。

デーラー神父―祭壇にかゝつていた聖パウロ三木の御絵は東京の信者の画かきさんの木村圭三さんに書いてもらつたものです。カスタニエ司教さんがこの方に頼んだんです。それと同じ絵が今でも東京の上智大学にあるそうです。

原田すさ子―そうなんです、私も始めに上智大学の聖堂にかゝつているのを見ていましたので、それと同じものが住吉にあつたのをみてほんとにびつくりしたんです、矢張り同じ画かきさんのものでしたね。

デーラー神父―ほんとにいゝ画でしたが戦災でみ堂が焼けた時に一緒に焼けたんですが、その時出してればよかつたのに後で残念でした。

司会者―御影から住吉へと教会が替つて来た時分の様子はどんなものでしたか？。

メルシエ神父―信者は少なかつたが組織もどうやら出来て教会委員には小高親さん、近藤さんの二人になつていたゞき、婦人会の方は松本鞠子さんなどが中心になつてなにかと手伝つていただいたものです。そして若い青年の方では、さつき申した方々が活

躍して下さつたものでした。

山邑美重子ー長谷川さん（現住友化学工業社長長谷川周重氏）もその時分にたしか住吉教会で洗礼をうけられたのではないでしようか。ハツキリ知りませんが。私は今でもあの方が聖体拝領をして居られる後姿が眼にうつゝて、昨日の事のような気がします。

昔はきびしかつたという話

司会者ーその時分の近隣の教会の模様を一寸ー

メルシエ神父ー東隣りは夙川教会でしよう。芦屋はなかつたから。西隣りは、矢張り下山手教会の範囲でした。六甲教会は後から出来ましたから。中山手は外人専門でしたから日本人に関係はなかつたんです。

司会者ー夙川教会には永田神父さんが居られましたね、それで、永田神父さんがあの悲壮な最後をミサ中聖堂内でなされて、その後任にメルシエ神父さんが住吉教会から代られたというわけでしたね。

武田綾子ー永田神父さんというと私は忘れられぬ思い出があるんです。私は聖心女子学院で公教要理の勉強してその洗礼は夙川で永田神父からうけたんですが、その時の試験がとてもむつかしかつたんです。今はそんな試験はないようにきいていますが、その時はなんとあの問答様式の公教要理を始めから終りまでカツチリときかれましてほんとに四苦八苦でした。それと、堅振の時もそうでした。聖堂の中で信者のみなさんが大勢居られる前で一人づつ、立つて司教様の公教要理質問に答えるわけで、或る大人の方は途中でつまつてしまつて、まつかな顔をして居られるのをみて全く気の毒に思つたことがあります。昔はほんとに信者になるのも全くきびしかつたでした。それを思うと今はほんとに楽なものですね。

司会者ーそうですね、なにしろ昔はカトリックとは言わなかつたんですから。天主教といつていました。私は小学校の時、先生からあなたの家の宗教は、ときかれて天主教といつたら、天理教ですかといわれましたよ。（笑）

真浦みねー昔は教会の勉強でも皆暗記させられたものですね。武田さんが言われましたように公教要理でも始めから終りまで丸暗記でした。そして祈禱文でもやはり丸暗記でした。

メルシエ神父ー真浦さんには私も驚きましたよ。戦争中でしたか、夙川の教会で、夜のおいのりの時に、途中で停電してしまつたんです。すると祈禱文が読めないので皆、つまつてしまつて困つたんです。すると真浦さんだけは、あの長い聖マリアの連禱をスラスラ始めから終りまで一人でとなえ終えたんですね。まつ暗がりの中で。ほんとに感心しました。

真浦みねー　まあー

デーラー神父ーきびしかつたと言うと下山手教会の主任司祭ペリン神父さんでしよう。

尾形竜子ーこれは有名です。とても六ケしい神父さんで私達も大変きびしく導かれました。

司会者ー而しえらい神父さんでしたね。人にもきびしかつたと同様に己れ自身のためにもきびしい生活をされた方でした。クリスマスの日など告解をしに行くと、寒い告解室の中でうづくまつて何時間も信者の告解をきいて居られました。日曜日ミサをよくサボツていた私などクリスマスにはせめて告解をしたいと思つて行くと、すぐには告解をゆるされませんでした。「あなたはもう少し日曜日休まないようになつてからでないと告解をききません」といわれましてね。クリスマスに御聖体をいたゞけなかつた思い出があります。ペリン神父さんは聖体をいたゞく人にはその日曜日に必ず告解をして心を浄めてからでないとさずけられませんでした。ですから毎日曜日告白です。

メルシエ神父ーそれで面白いんですよ。住吉教会の初まつた頃は、西の方は下山手教会所属であつた人と、東の方は夙川教会所属であつた人の二通りの信者が毎日曜日来たわけですね、すると御聖体のために毎日曜日必ず告解をしてからいたゞく人と、告解をせずにいたゞく人があるんです。告解をする人は下山手から来た信者、告解をしないのは夙川教会から来た信者（笑）ーこれですぐにその人がどこの信者だつたかわかるんです。今はそんな事ありませんがー。

真浦みねーでも神父さんー毎日曜日みなが告解だととても忙しくて困られるでしよう？（笑）

カスタニエ司教さまの思い出

司会者ー昔しの神父さんは説教も永かつたですね。ペリン神父さんは四十分位も。

メルシエ神父ー一週間かゝつて充分準備するんですから、よくわからせようと思つて時間が足りなくて、それで長くきかせ度いからでしよう。（笑）

司会者ーカスタニエ司教さんもそうでした。最後になつて、「結論として言いますとー。」となつてからでも、まだ十分間位なさつたと、だれかゞ言つていましたよ。ー（笑）

司会者ーカスタニエ司教様もこの教会の主任司祭として居られた事がありましたね。

デーラー神父ーええ、二度ありました。一つは水害のあつた時ー、モーラー神父さんが主任としておられた事になつていましたが、而しそれはほんとは司教様が主任だつたんです。それはモー

ラー神父様は日本に来て間もなくで、住吉に一人で居られたんですが、心もとなく思われたゝめ、司教様が主任となつてあげるから辛抱しなさい、と言われていたんです。又間の悪い事にモーラー神父様が住吉に来て一ヶ月目にあの大水害で、教会がひどい被害でしよう。それでモーラー神父様は司教様に手紙をかいて「司教様、あなたが主任司祭ですから、よろしく願います。」と言つて涼しい顔。（笑）

司会者―これは面白い。

デーラー神父―まあ、それが一回と、次ぎは戦争中に日本人の田口司教様に教区長の任務を譲つて隠退されてから住吉に住むことになつた時との二回です。カスタニエ司教様は住吉教会建設の恩人ですと同時に最後は自分が主任司祭として住まわれ、とうとうこの教会で亡くなられたんです。

メルシエ神父―丹毒でした。お年は六十三才、からだも大きく元気な司教様でしたが、今から思へば若死ですね。不思議な事に夙川教会を建てられたブスケ神父様と同時に亡くなられた事でした。ブスケ神父様が昭和十八年三月十日、カスタニエ司教様は三月十二日でした。或る神父様が、司教様が亡くなる前に見舞いに行かれると、私はもう死にますから、死んだら立派な葬式をね。と冗談を言つて居られたそうです。うそだと思つてたらほんとに亡くなられました。ほんとに最後まで明るい司教様でしたね。

司会者―司教様と一緒にこの住吉におられたんでしようか、あのお年寄りのピロース神父様は？

デーラー神父―ピロース神父様が先きに主任として来られていて、それから司教様が住吉においでになつたんです。その時に手助けとして特に公教要理を受持つために西村神父様がよばれたんです。後で西村神父様も徴集されて海軍に入られましたがね。ピロース神父様はその時もう大分年でしたから少し弱つておられましたね。

川端シヅエ―面白い事があつたんです。ピロース神父様は散歩もなさいますし、よく外に出られました。そして信者の宅を訪問されるんですが、私の家に来るのに隣りの家にまちがえて入つて大きな声で「コンニチワー」と言われましてね、私はおかしいやら、お気の毒やらで…（笑）

大水害と戦災の思い出

司会者―今日は折悪しくモーラー神父様に御出席願えませんでしたが、水害のあつた時の事を皆さんからお話し願い度いですが

川端シヅエ―昭和十三年でしたね。あの時はほんとに大変な事でした。モーラー神父様が近所の方を沢山教会の中へ助けられて皆からとても感謝されました。

千葉健吉―あの時はこの近所でもかなりの死人が出ました。私はその時信者ではなかつたんで、教会の内部の事はよく存じませんでしたが、何んでもある建物（多分以前の伝道場？）の中に死んぜ人が収容されて、お棺がおかれローロクの火が灯つていたことを憶えています。私はその時教会の西の方の丁度今グランドになつている所辺に住んでいました。住吉小学校の南側の壁の下あたりでも死人が埋まつていましたね。ともかく恐ろしい水の勢でした。

司会者―この水害が住吉教会としては受けた災害のまず第一歩だつたんですね。水害につづいては戦災、それから最後は台風の被害でした。それで戦災の時の印象をデーラー神父から御伺いしたいです。

デーラー神父―戦災をうけたのは八月六日でした。その時は教会では私と、ビロース神父様と二人、それから和田さんですね。警報が鳴つて空襲が始まつたのが午前〇時。それから二時頃までした。何度も飛行機がやつて来て焼夷弾をバラバラと落して行くんですね。司祭館の方に五ツ落ちて来ましたが幸いこれはうまく消しました。聖堂の上には二十発も落ちて来ました。それで消そうと思つて聖堂の方へ行きましたが火の手が大きくて到底手が出ず、香部室へ行つて品物を運び出そうとしましたが煙が一ぱい立ちこめて息苦しくなりとうどう外に出てしまいました。

司会者―御聖体はどうだつたんですか。

デーラー神父―そう、空襲がひんぱんに来るようになつてからは私は御聖体は出来るだけないようにしていましたし、又祭具、祭服など大切なものは皆とりまとめてトランクに入れていざという時には持ち出せるようにしていました。ただ残念だつたと思うのは聖パウロ三木の聖絵をもつと早く出しておけばよかつたと思うことですね。

司会者―教会の建物で結局焼けてしまつたのは―

デーラー神父―焼けてしまつたのは聖堂だけでしたね。司祭館の火は消して助けたんですが聖堂が燃えると、火がうつゝて来る心配があつたんで私はバケツで盛んに司祭館の外壁に水をブツカケて燃えないようにしました。

川端シヅエ―和田伝道士さん宅は縁の下から燃えだしましたね私も教会の方へ消火のお手伝いにかけつけまして伝道士さんの宅はなんとか水をかけて消しとめました。

デーラー神父―近所の信者のみなさんがずい分協力して下さつたのでほんとに助りました。それで結局伝道館には落ちず、司祭館、伝道士宅など聖堂以外は皆どうにか火を消して下さいまして残つたわけです。それで私はいつも空襲の時に香部室の壁の所に避難することにしてそこならまず安全だし、又どこが焼けても飛び出せると考えたので、そこに居ることにしていました所、大分

たつてから今度はそこへ行つてみると、なんと十キロ程もある焼夷弾のカバーのような蓋が落ちているんです。実はその時ほんとにギョッとしましたね。もしも私がその時そこに居たら、どんなになつていたか。

司会者―いや、全く恐ろしい経験でした。

デーラー神父―すんでから数えてみたんですが教会の敷地内に落ちていた焼夷弾の数は八十発ありました。

司会者―近所の信者さん宅などはどんな工合でしたか。

デーラー神父―ふしぎなことに殆んど全部助かつたようでした。

中里矢須子―私の宅も焼けずにすみました。

川端シヅエ―教会の方へ援けに行きましたが、私の方は焼けずです。

神沢いと―それでも焼けた家は大分あつて、教会から上、国道まではずつと見通しでしたものね。

尾形竜子―教会では伝道館が残つたんでミサはこゝでずつとあげられていました。

五十嵐喜世子―私は疎開していましたので、―住吉の戦災の時の事は知りませんでした。後で話をきいてびつくりしたんです。

都市計画で狭くなつた教会

司会者―空襲の次の災害というと、台風の被害ですか。

デーラー神父―そう、それもあるんですが、その次は戦後の都市計画による教会の敷地の強制収用でしよう。…これは災害とは言えませんけれど而し、教会としては一つの難事でしたね。私は実はその二年前にフランスへ休暇で帰へつていて知らないんです。ほんとはベロー神父さんがその時のことをくわしく話せるんですが、代つて申上げますと、初めに一千二百坪あつたのが約七百五十坪程になつたんですから四百坪程減りました。北側の道路が約五米、東側の道路が約五米それに南側が約二十米もとられて新しく道路が作られてしまいました。その代りに司祭館の西側がすぐ境界だつたのが約十米も西に移つてそれだけ換地として呉れたんです。少いですが―。勿論これらの費用は凡て市が負担はしてくれましたが、教会としては大きな損失でした。この敷地の移動で伝道士宅も少し南西に移し、伝道館―これは聖堂が戦災で焼けてしまつて後は仮聖堂として用い、ミサはこゝで毎日行つていましたが―これも、境界線にかゝりますので南西に移築させました。そんなことで教会の中はゴタゴタして半年以上もかゝつたでしようか、やつと完成して、不満足ながら平静な状態がつゞいて

から、今度はあの台風の災害をうけたんです。私もその時フランスに居て病気で寝ていたんですが、ベロー神父さんから知らせを受けてほんとにビックリしました。

司会者―今日はベロー神父さんが日曜学校生徒の運動会の方へ出て居られて、御出席願へませんでしたので、その台風の災害の事については又の機会にベロー神父さんから詳しくお話しをしていたゞくことにいたしましよう。ところで今日は古い皆さんにこんなに集まつていたゞいて滅多にない機会ですので、皆さんになにか面白い過去の思い出をお話しを願いたいんですが。

神父さんとおひげ

安田久代―私は昔育ちなもんでこんなことを申上げるとなんですが、小さい時から神父さんというと皆フランス人でひげを生やした方ばかりだと思つてたんですが、この頃はアメリカ人とか、ドイツ人とか、―ひげもない方があつて、どうもなんだかピンと来ない・・・・。

司会者―同感ですね、メルシエ神父さんも、最初住吉に居られた時はひげがありましたね、夙川教会に代られてからおそりになつたんですが、なにか心境の変化でも？

メルシエ神父―いいえなにもありません。私も最初はひげをそつてしまいたいと考へだつたんですが、司教様に叱られるんではないかと心配して、それで或る時私は司教さまに「或る神父が、ひげをそつてしまいたいので司教さまに御ゆるしを願つたら許可されますか、それともお叱りになりますか」と、他人事にしてさぐりを入れてきいたんです。すると司教さまは「いゝえ、なにも怒りませんよ、自由ですから勝手にしたらよろしい」と言われましてね、私はホツトして早速翌る日そつてしまいました。

―（笑）―

司会者―さぐりを入れてそるとはねー。

真浦みね―その時、メルシエ神父様が私にね、「真浦さん、あなたよく切れるカミソリありますか？」と言われるんでしよう、変だな、カミソリで神父さん何にを切るのかしらと、紙でも切られるのかしらと思つて出したんです。そしたら暫らくしてから神父さんの顔を見てビックリ、全く人が変つてしまつたようでした。

―（笑）―

メルシエ神父―次の日曜日にミサを立てた時、待者のこどもが私の顔をみて、なんとも言いようのない変な顔をするんですね。そして帰へる時でも、いつもするのにその日は私に挨拶しないんです。―（笑）―

デーラー神父―大体神父がひげを生やしていると支那などでは尊敬されるんですね。日本でも子供達は、神父さんのヒゲに親しみを感じてくれますね。今は神父さんになつた朝山さんなど、小

さい時に私のヒゲをよくひっぱって遊びました。それで神父さんになってから私の所に手紙をくれて、神父さん、昔よくあなたのヒゲを引っぱってごめんなさいってよこしましたよ。

―（笑）―

司会者―いやこれは面白いお話しをうかがって愉快でした。今日はほんとに皆さんお忙しい中を来ていたゞき、いゝお話しをきかせていただき有難うございました。それではこれで終らせていたゞきます。

教会風俗の変遷

教会の歴史を回顧する時、裏面史とも言うか、教会風俗の変遷をふりかえって見るのも興味がある。

南蛮屏風などを見ているとよくわかるが、日本人の服装は歴史的に非常な変化をしているが、それに比して西洋のものはあまりに変化はなく、聖職者の服装も、その時代のものは戦争前までのものとくらべ大した差はないのがわかる。スータンの上にマントを着ていたのはつい先頃まであった。そして黒のスータンだけが唯一の服装で、外出にも、室内でもこれで、夏などは暑いのでアルパカを着たものだった。

ところが第二次大戦後は大きに変化し、今日では神父さんは、ローマンカラーに背広とズボンで外出されるし、夏は開襟シャツという軽装が許されている。帽子は昔は黒のつばの広い山高帽型のもののみだったが今日では、それは全く見られず、ベレーよし、中折れよしということに変化した。たゞ修道女の方だけは戦前も戦後も、百年前すら殆んど変化はしていないと言ってよい。

一方信者の方はどうだろう。これは日本の時代が変ったと同様に変遷した。チョンマゲから散髪へ、和服から洋服へと。特に女子の場合、戦後洋装一辺倒となったのは実に大転換だ。それに従って教会でも聖堂は畳敷きだったのが、もうそれはどこにも見られず、全部の教会が椅子席に変ってしまった。けれどもこゝで特に注意したいのは戦前は、クリスマス、イースターの二大祝日には男子は多くモーニング、もしくは紋付羽織袴でミサに与った。壮年だけではない未婚青年も矢張りモーニングを着た。それに比し、今の服装はチト淋しい気がせぬでもないのだ。

神戸カトリック教会小史

腰高輝次

神戸最初の天主堂

住吉教会の正門こそ二十六聖人の通つた道だつた

神戸の地でカトリックの最も古い歴史の跡はというと、それは四百年の昔から初まつているというべきだ。そんな話を持ち出すと人は突拍子もないと言うかも知れないが、実際の足跡だから、而かも尊い足跡だから大切に考えてみる必要がある。東洋の大使徒といわれ、日本へ初めてキリストのみ教を伝えられた聖フランシスコザベリオは一五四九年八月彼昇天の祝日に鹿児島に上陸されている。それから平戸、山口を経て京都へ行かれたのであるがその途次神戸の沖を船で渡り堺に入港、上京された事が記録に残つている。神戸沖を通られた時は丁度クリスマスの前後頃で、聖人は底冷えのする船中でマントにくるまりながら寒さにうづくまりつゝ、祈りに時を過ごして居られた。これがそもそも神戸の町に聖教の光がかすかではあるがうつつた最初といえよう。聖人が日本で蒔かれた種はその後次第にみのり、（一六〇〇年）には信者の数は六十万人に達していたと記されているから、或いは神戸兵庫の地方にも信者の数人はいたかも知れない。やがて日本の教会にも試練の嵐が吹き荒れて迫害の犠牲者が出るようになるが、その最初が聖パウロ三木を含む二十六人の聖殉教者であつた。この殉教者達は、大阪で捕えられ、京都へ送られてからは長崎への死の行進となるのだが、その道が西国街道であつた事は歴史の本に書き残されている。十二才から十六才までの少年を混え、その人達は京都で町中を引廻わされた後、堺に下つた。そして一行は

次いで尼崎を経て西宮で一泊し、更に兵庫から、播州路へと重い足を引きずつて、歩かれた。その西国街道は今でも厳として神戸の街を縦貫して通じている事を私達は深く銘記せねばならない。これは尊い聖人達の足跡である。

私は最初、二十六聖人が長崎へと引かれて歩かれた道は当然阪神間に通じている旧国道だと信じていた。その旧国道が即ち西国街道そのものだと思つていたのだつたが、実は最近に至つて実に全く意外な事実を知つたのだつた。それは、神戸市内を通つている旧国道の跡が僅かな部分で私には判明しかねるヶ所があつたので、それを確かめるために先程、私は神戸市役所内の市史編纂室を訪れて資料をみせてもらつた。旧国道に関する限り、それは殆んどの部分が私の思つていた通りだつたが、意外な事実を知つたのは、この旧国道は明治国道とも言われて、明治の初期に国費で開かれたもので、昔の西国街道は又別個の場所だつたことである。その西国街道もハッキリ判つた所もあり不明の所もあるのだが、魚崎、住吉、御影、大石のあたりではかなり明瞭だつた。そこでこれを辿ると、実に思い儲けぬ事実にぶち当つた、というのはそれが住吉では丁度、吾々の住吉教会の北側の道がそれだつたことだつた。全くこれには私は驚いた。住吉川を越えて（そこに今は橋はないが、昔はあつたものらしい）西へ下り、住吉小学校の南側を通り、住吉教会の北側を通つてまつすぐに阪神の御影へ、神戸大（昔の御影師範）の南を西へ、そのはずれを北により、初めての筋を西へ、石屋川を渡り記田町の南を西進して大石川に出るという道順がそれである。こう聞いてみると、なるほど私も幼い頃に昔大名が通つた道と教えられていた道があつたが、記田町附近で丁度それに当つている。住吉教会の正門の前の道がそれだときいて私は今更ながら、その奇縁に驚き、且つ聖パウロ三木の御導きがこの教会を建てさせた事実に胸を打たれた。今私達はこの道にたたずんで、四百年前のことを瞼に浮べ、破衣に身を包み、難渋しつゝ歩まれた二十六人の聖なる姿を思い起して目頭があつくなる思いになる。神戸市を縦に貫いていたこの古い道には今では人家が立並び、自働車が溢れて、その排気ガスで人も息苦しい有様となつたが、而し信仰の自由を与えられている今の我々の幸せを思うとまことに勿体ない感にうたれるのだ。

神戸市内にはキリシタンの遺跡は何一つ残つていないが、吾々はこの立派な足跡のあることを忘れず殉教者達の信仰を学ぶべきだと私は思う。これが神戸にのこるカトリックの最初の模範的事跡と言える。

幕末開国以後

｜最初の宣教師神戸に上陸｜

明治の黎明を迎える頃浦賀の港に入つたペルリ提督の卒いる黒

船がブツ放した大砲に鎖国の夢を破られた幕府が、世界の大勢に押されていよいよ開国に踏み切ることになるが、横浜と神戸が港を開いたのはその時である。記録を見ると神戸のそれは慶応三年（一八六七年）の事であつた。即ち今から九十八年以前の事で、その頃又長崎、新潟、函館も開かれて、外人も居留することになつたが、当時いち早く禁教令下の日本に再びキリストの教えを復興させようと、なみなみならぬ辛苦を重ねてフランスからはるばる危険な日本へ命を堵して勇敢なカトリックの宣教師が海を渡つて来ていた。それがジラール神父や、プチジヤン司教を初めとする巴里外国宣教会（ミッション、エトランゼール、ド。パリ）の諸神父達であつて、長崎、横浜、函館についで神戸にはムニク神父が（一八六八年六月）に上陸して来た。幕府は外国人の住む土地を居留地と称して、特別の一区畫内に指定したが、神戸では今まで元居留地と称ばれていた所で、それは大丸北側道路より南側市役所電車通（フラワーロード）より西側、又西の方はメリケン波止場、鯉川筋の一線までの区域であつた。最初ムニク神父は旧街道にあたる今の元町通りにさゝやかな家を手に入れて、そこに礼拝所を作つたのが、神戸に於ける教会の初まりで、慶応四年（一八六八年）六月に最初のミサが挙げられた。けれどそこはいかにも手狭であつたので、次いでムニク神父は少し広い所をさがした結果、生田警察署の近くに一つの貸家をさがしそこに移つて、そこで居留地が地均し工事を完成するのを待つて、その年の九月に仲町三十七番地の敷地を手に入れて、聖堂建設の準備を進めることになつた。元町及生田警察附近の教会所の位置は今では目印しもなく定かではないが、仲町の位置はもはや明瞭である。それは今の大丸百貨店の南側一部分とその以南次の通りまでで広さは四六九坪あつた。ここで先づ司祭館が建てられ、次いで聖堂が建設されたが、明治三年（一八七〇年）に完成、四月の復活祭に献堂式が行われ、「聖母の七つの悲しみ」にさゝげられた。この聖堂は当時外国建築物の中では最も大きなもので、ステンドグラスもまばゆく、飾り付けも立派で、三百六十人を収容できる大きなものであつた。敷地の正門は南の道に面し、門を入つた突き当りに聖堂は南面して建てられていた。聖堂の全体の形は平面図でいうとローマのバジリカと同じく十字形をなしていた。そしてオルガンは十字架の横木の部分にあたる場所に置かれ聖歌隊はその所で歌つて居たことを私は記憶している。内部は中央部が畳敷きで両側に椅子席が設らへられていて日本人は畳に座つたものであつた。

最初の修道女来る

この年の十二月にはムニク神父は副司教に任ぜられたが、惜しいことに翌年十月急死されたのでその遺骸は最初の神父として、

その祭壇の下に納められた。そこで後任にはヴイリヨン神父が当られた。最初の頃は勿論日本全体は一つの教区として司教は一人であつたが、やがて横浜を中心とする北緯教区と大阪以西の南緯教区の二つに分たれ司教は二人となつた。ヴイリヨン神父は奇行をもつて聞えた人で、カトリツクの良寛さんとも言へる神父さん。熱烈な布教心に燃えた人で、明治十一年頃にあの布教困難だつた時代にすでに一年間に二百三十六人もの日本人信者を作つて居られる。神父さんは又明治十年にフランスより修道女を招く事を考へ、司教に要請して孤児院を建てたが、それは教会の北側、今の大丸百貨店のある場所（裏町四十一番地）で、幼きイエズス会のフランス人—修道女がその任にあたつた。それより先大阪の川口に孤児院を開いたベルナルジヌ童貞も同じ修道会でこれが関西に来た修道女の最初の人だつた。

而しヴイリヨン神父は明治十一年には京都に初めて教会を開くため、特別の命をうけて神戸から転出されたのでその後任には、シヤトロン神父が主任となられた。シヤトロン師は明治二十九年（一八九六年）までこの教会を司牧されたが、ワスロン司教が急逝されたので、その後任としてローマ教皇より司教に任命され大阪川口司教座教会に転ぜられ、その後には、備前福山で熱心な伝道に従つて居られたフアージユ神父が着任された。師は二十五才新進気鋭の神父だつたが、仏語の外、英語にもたけ外人司牧には最適とされて歓迎された。当時、居留地教会には、外人信者が一四〇人、日本人信者は約四百名居り、これ又新進のペリン神父がこの日本人のために働いていた。

日本人のための最初の説教所

ペリン神父は増加して来る日本人信者のためになんとか独立の一教会を作りたいと念願していたが丁度明治十八年（一八八五年）に多聞通鎮台筋（今の有馬道の一ッ東の筋）に六畳の空家があつたのでこれを借りて伝道場として布教運動を初めた。当時外人は居留地以外には住むことが出来なかつたのでペリン神父は毎日居留地から通つて、日本人の生活に溶けこんで仕事に専心した。

明治二十九年（一八九六年）には兵庫区西出町四七八番地に稍広い空家を見つけたのでこゝに移転することゝなつた。明治六年禁教令の解除があつて後も日本人民衆はキリスト教に対して理解に乏しくむしろ反対の気分を持つものが非常に多く、ペリン神父の布教はまことに困難をきわめた。多聞通の教会では漸く信者一五名位しか出来ていなかつたがペリン神父は西出町教会が開かれてからは戸別訪問を行つて、信者の獲得につとめた。と同時に、同師は社交の必要なことも痛感し神戸各界の名士等とも親交を深めることに努力した。そして兵庫県知事、神戸市長、神戸税関長、裁判所長、商業会議所会頭、郵便局長等と図つて神港クラブと称

する内外人の社交機関を作り宗教と政治には触れずに交際された。ペリン神父は又永年に亘つて神戸高等商業学校でフランス語の教鞭をとつておられ、又神戸で著名の名士にも個人的にフランス語の教授などを行い、上層社会に知己は多かつた。上層下層を通じてのペリン神父の努力は漸くその緒につくことになるが矢張り時日の経過は絶対に必要であつた。西出町の教会に通つていた私の兄の思い出によると、それは今の市電西出町の停留所より少しく東方七宮神社の向いを入つた辺りにあつたらしく、今の新開地本通りはその当時湊川の水が南に流れていた川原で停留所の所には橋がかゝつて居り、その橋を渡つて日曜日教会のミサに行つたと語つてくれていた。

ペリン神父のたゆまぬ努力は、それでも着々と成果を挙げていた事は確かで、仲町の天主堂も外人及日本人で毎日曜日のミサに漸く手狭まになつて来たので、神戸にどうしても日本人専門の天主堂の建設の必要が痛感される事になつて来た。多聞通り、それから西出町にて教会を作つて来たが、なんとしても大きな聖堂がほしい。ペリン神父はこれを自分の畢生の宿願として営々働いて来られたわけだつた。そのためには土地と、資金が必要だ。

聖アントニオのメダイの導きで　土地を入手

先づ土地を求めるためにあらめる方面に連絡をとつていたが丁度その頃、下山手の監獄（刑務所）が移転した跡に空地があつてそれが師範学校の予定地になつていたのが、偶々変更となり御影に建設されることゝなつたため、慈善事業又は学校団体に払下げられる事となつた。これを聞いた師は早速運動を初め、知事、市長に請願書を提出したが、その決定が官の都合にて仲々進捗せず難渋したのでペリン神父はシャトロン司教のすゝめで、落し物や希望したものが自分の手に入つて来ることを守つて下さる「パドアの聖アントニオ」のメダイをひそかに監獄跡の土地に投げておかれた。そうして毎日の祈りの中で、この土地が一刻も早く神父の手に入るように念じて居られた。その間のペリン神父の焦燥は想像するに難くはない。けれども神は師の熱意を見捨てることはなかつたのである。その払下げの最後的決定がなされたのは二年後の明治三十四年（一九〇一年）の四月で、くしくもシャトロン司教の霊名の祝日だつたという奇縁にめぐまれる結果となつた時の神父のよろこびは実にたとえるものがなかつたのであつた。このメダイの導きによつて土地を入手した事はペリン神父が後年私のようなものにも語つてきかせて下さつたほどに、生涯忘れられぬ事蹟となつたのである。

この土地は現在、下山手教会が存在する場所そのもので、広さは千五百坪で一段高い高台になつたその上だつた。そこで約千坪は神戸女子教育院の孤児院と幼稚園との用に充てるため、フラン

スの修道女会「幼きイエズス会」が受入れ、六百坪は教会堂建設のために教区がこれを受入れた。

そこで早速、司祭の住居である司祭館が建築されることになり工事が初められたが、その年の十一月にはすでにその祝別式が行われ、ペリン神父は五年間住まれた西出町の教会を出てこゝに移転されたのである。そしてこの時初めて門の入口には立派な「天主公教会」と真新しくかゝれた看板がかけられ、日本人のための聖堂建立の一歩を踏み出したのであつた。そして続いて伝道場の建築も進められ、翌明治三十五年（一九〇二年）には四十二坪弱の平家建日本家屋の伝道場が完成した。こゝで毎日のミサが挙げられ、日曜日には多数の日本人信者が集まつた。それは仮聖堂ではあつたがこの時、師が日頃敬慕された「聖家族」に奉献されている。この建物は後々までも伝道場として残り、信者の集り場として永らくみなに親しまれたが腐朽がひどくなり今年春、とりこわされてその後に新しく鉄筋造りの幼稚園が建てられたのは今見る通りである。

ペリン神父

日本人の聖堂初めて完成　盛大に献堂式

仮聖堂は出来たがペリン神父の夢は尚立派な聖堂の建設へとひ　がつていた。日夜そのための祈りと努力がつゞけられていたが約八年間の辛苦がみのつたか、或る日、フランス祖国から思いがけぬ寄付金が贈られることになつたのである。それは師の親友であるコンパニオン神父を通じてヘンリゴ・ド・パルデイ男爵から一万フランが届いたのである。ペリン神父のよろこびは察するに難くない。それに加えて某アメ

リカ夫人より一千ドル、及びマルナス神父等より三千円の寄付があり、又その外ペリン神父は日頃自分が神戸高商の教授をして得られた報酬などをすべて貯金されていたのでこれらを合すと聖堂建設には充分な資金となつていた。こゝで漸くその建設工事にとりかゝることゝなり、明治四十二年（一九〇九年）にはシャトロン司教によつて定礎式が行われ、それより十八ヶ月を要して翌年完成、九月十八日には盛大に献堂式が行われた。その時の模様を当時の「声」誌に報ぜられた所から抜萃すると「……下山手天主公教会にては新たに聖堂の建築成り、霊父三十余師を迎えて祝別式挙げられたり、司教閣下は、聖堂内外を祝別せられ、次ぎにワグネル師の説教あり、ミサ聖祭中司教閣下は日仏英三ヶ国語にて親諭を賜り、後、教父陛下の祝福を下されたり。式後、信徒一同茶菓を受けて退散す、……当教会は当市に名高き諏訪山公園に近く、神戸停車場と隔てること相等しく、殆んど市の中央に位し仰げば近く北に欝蒼たる六甲山脈を望み、俯せば南に洋々たる内海を望む、高燥閑雅他に多く類を見ざる勝地なり……」とある。明治四十三年というと、神戸に市内電車が初めて開通し、春日野道から兵庫迄走つた年である。市民も市内の高台に新しい赤煉瓦造りの壮厳な聖堂を仰いでそのエキゾチックな姿に驚嘆したことであろう。その姿は今も下山手八丁目市電停の北側に厳然としてペリン師の風格を表わすかの如くに聳立している。聖堂の広さは奥行十八間、間口七間、高さは九間で屋上の十字架は巨大な石にて刻んだもので、内部正面には美しい聖家族その他のステンドグラスが入れられ、当時としては誠に壮麗なものであつた。そしてこの聖堂は仏国の寄付者バルディ男爵の名をとつて聖ヘンリー皇帝証聖者に献げられた。

ペリン神父の偉業

これで神戸市内には二つの聖堂が出来たわけで一つは居留地仲町の天主堂で、それはその時から専ら外人専用のための聖堂とされ、日本人はみな下山手天主堂に参詣することになつた。その当時の教会所在地は大阪以西では神戸下山手だけで、岡山までは一つもなく、従つてペリン神父の受持小教区は兵庫県全域、及鳥取県の全域に及んでいた。そのため同師は交通不便の中を、従歩で又或る時は馬にのつて巡回して布教に従事されたがその困難は想像に絶するものがあつた。後年しばしばその思出を私は同師から聞かされたことがまだ耳にのこつている。鳥取県の山奥を十数回にも亘つて歩かれて伝道されたことはさすがに健脚で頑丈な師でなくては出来ない仕業であつた。

かくてペリン師は昭和十四年（一九三九年）八月二十一日八十二才を以つて帰天されたが叙品後の五十五ヶ年間を一回も帰国されることなく、全く日本の神戸市のみに滞つて生き、布教された

事は巴里外国宣教会の司祭としても珍らしい異色の存在だつたと言へる。下山手教会で同師が洗礼を授けた日本人の数は実に一五〇〇名にも達し大きな足跡を残されたが中でも親しく薫育された信徒の中から今日二人の司教（古屋義之京都司教及小林有方仙台司教）を出されたことは師の感化がいかに大きな力となつていたかがうかがえる。又司祭、修道女等の聖職者も数多く出ているのは勿論の事であつた。師逝つて正に巨星地に落ちた感がしたが、昔の神戸の信者にとつて、下山手教会はペリン神父であり、ペリン神父はイコール下山手教会と、両者一体であつて分けて思い浮べることは出来ぬものであつた。

中山手教会の誕生

一方下山手教会以外の情勢はどうであつたか。居留地の仲町の教会はシャトロン神父が司教となられてからはフアージュ神父がその後任となられた事は前述した。師はまことに温容潤達の士であり、ユーモアのある人徳はよく、神戸在住の各国外人間に好印象を与え、明治二十九年にこの教会の主任となられてから、この教会一筋に生き、而かも大阪教区の会計担任として、又後には副司教としてその全生涯を送られた。

明治も終り、大正の年代に入つてからは神戸も次第に発展して居留地の地区も外国貿易の中心と化し、外人達は仕事の場所として居留地に業を営んだが、外人の内地雑居も認められるようになつてからは、その住所を閑静な山手の地に変えるものが次第に多くなり、北野町、山本通り辺りはむしろ外人の居住地の感を呈して来た。そこへ仲町の天主堂も、建設当時の荘麗さも次第に褪せて地震、白蟻の害なども加わつてもはや老朽化したのでフアージュ神父はこの移転を考慮せざるを得なくなつて来た。そこで土地を求めた所、中山手一丁目の現在の教会場所にさがし当てたのでそれを購入し、大正十一年に工事を起し、翌十二年十二月目出度く竣工、二つの鐘塔を有する壮麗なゴジックの堂宇が山手に聳えて神戸港を眼下に見下ろすことゝなつた。その献堂式にはカスタニエ司教が当られたが、自分が叙階後、初めての献堂式として歓喜に満ちて祝別を行われた。そしてこの聖堂はイエズスの聖心に献げられ、聖心の美わしいステンドグラスが正面祭壇の上の窓に入れられた。内部の広さは奥行十八間、間口七間半で、大阪教区内の聖堂としては京都三条河原町天主堂に次いで二番目の大きさだつた。

修道女たちの献身的活動

又神戸には二つの教会の布教活動以外にカトリックの社会事業が着実に地に根を下ろして活動をつゝけていた事は見逃すことが出来ない。それは前述の居留地に教会があつた時にヴイリヨン神

父の奔走でフランスから呼びよせられていた修道女の一団、即ち幼きイエズス会の童貞さん達が教会の隣接地（今の大丸百貨店の位置）に修院をおいて孤児を養つておられたが、ペリン神父が下山手の高台に教会の土地を手に入れた際にその北側半分に移転して建物を建て、こゝで更に孤児院を大々的に拡げ、神戸女子養育院と称し、アントニン院長を中心として数名の修道女がその仕事に従事した。その後この孤児院は神戸でも著名の存在となり、何回となく表彰され、又アントニン童貞には褒章が贈られ、天皇陛下よりも御下賜金を数回受けている。又一方、下山手一丁目八番にも同会の修道院が建てられ数名の幼きイエズス会修女がそこで外国人の子供のための小。中学校を経営しセントメリー学園と称して教育に没頭していた。教会内部ではその時代に番地でその修院のグループを言い表わす習慣があつて、居留地にあつた時は童貞さんは四十一番地に住んでいたゝめに「四十一番の童貞さん」とよび、又セントメリー学園は八番地にあつたため「八番の童貞さん」と呼んでいた。八番は土地も広く、中でも特に美しい庭が、傾斜面にあつて聖母聖月ともなると美しいさつきの花が咲きみだれ聖体の祝日には必ずこゝで聖体行列が行われて信徒多数が集まり、美しい雰囲気をかもし出していた事を私はいまでも忘れられない印象として憶えている。而しこの「八番」は戦後、兵庫県農業会に売却され、現在では七階建ての農業会館が建つて、すつかり面目を変えてしまつた。最も今日では周囲は繁華なバーやキャバレーに場所を占領せられて修院であるためにはあまりにも俗化してしまつたのにもその存在価値はなくなつたと見るべきであろう。今日では神戸地区にも各種の修道女会があつて働いているがこの幼きイエズス会修道女会が明治。大正を通じて京阪神に活動した唯一の女子修道会で日本の社会事業につくした功績は大きかつた。今は宝塚市鹿塩に本部を移し、神戸では北野町二丁目に修道院を持つている。

鷹取教会を新設

再び話は下山手教会に戻るが、ペリン神父の営々たる布教事業によつて信者は次第に増加して、昭和の初年頃には已でに千数百名にも上つてさすがの大きな下山手天主堂も手狭になり、クリスマスや、御復活祭には信者は聖堂に入り切れず後部入口にギッシリ立ちつくすと言う有様、かつて古屋義之京都司教及故都田耕雄神父の叙品式が下山手教会で行われた節などは各地から来た信者も入れ、参列者は下駄、靴を手に持つて聖堂で身を動かすことも出来ぬほどのすし詰めになつていた事を思い出す。こんな状態となづていたので、神戸市内にいま一つの教会の必要性が痛感されていた。そこでカスタニエ司教は下山手よりも西の方面で教会設立を考えられた結果、長田区海運町三丁目に土地を求めて鷹取教会

を創めることを決意された。よってこれが工事に着手し昭和二年（一九二七）四月には木造平家建の教会堂が出来上り、聖ペトロを保護の聖人として献堂式を挙行した。そこで市内の信者で西部に住む人達は下山手より離れて鷹取教会の所属となつた。その数は百数十名で、初代の主任司祭はそれまで下山手教会でペリン師の下に助任をつとめられたジュピア神父であつた。

住吉教会の創設

それより先、阪神間の中間的場所として西宮が着目され、阪急夙川の地にブスケ神父の努力によつて教会が設立されて居り、住吉川まではその区域になつていて、すでに下山手教会から分離独立して居り、又姫路にも、教会が設立されていて下山手から分離されて下山手の区域はかなり縮少されていた。

昭和十年になつて、神戸市の東部にも増加してくる信者のため、又将来の発展性も考慮に入れて新しい教会が必要となつていたので、カスタニエ司教はその候補地として御影町附近を指定し、鋭意土地を求めた所御影町申御田に日本家屋を見つけたので仮教会をこゝに作り、翌年十一年には更に新しく住吉村丸の後に一千二百坪の土地を購入して聖堂建設にかゝつた。これが竣工したので献堂式を十二月十三日に挙行して、日本の聖人聖パウロ三木を保護者と定めてこれに献げ、初代主任にはメルシエ神父を推された。こゝでこの教会は東の方は夙川教会の地域を譲り受け、西部は下山手教会より移譲を受けて独立することになつた。

六甲教会の創設

又、独乙系イエズス会では教育機関として東京に上智大学を持つだけであつたが、関西進出を考へ昭和初年頃より六甲山中腹に、男子の中等教育機関として六甲学園を開設した。武宮神父を校長として独特の厳格な教育方針をもつて阪神地方の子弟の教育に注目されたが、学園を中心としてぽつぽつと信者も増加して来たので附属礼拝堂では不備となつたゝめ、一つの小教区教会を設立することになり司教の承認を得て先づ最初灘区篠原北町一丁目二〇番地福島作市郎氏方に仮教会を設置して昭和二十三年十月四日初ミサを挙げたのが六甲教会の初まりである。その後篠原北町一丁目四〇番地の岡山大子さん方に移され、次第に参詣する信者の数も増加して来たので、本格的の聖堂建設の必要が感ぜられて来たそこでイエズス会では新たに赤松町の現在の場所に土地を購入し昭和二十七年春より建設にかゝり、翌昭和二十八年春完成したので五月の吉日を期して献堂式を挙行し、無源罪の聖母に献げられ田口司教の手によつて新聖堂は祝別された。最初よりブラウン神父が主任となり、昭和三十八年迄在任されたが、それより二代目ピーター神父にゆづり、現在同神父が主任司祭となつている。

神戸市内の教会は凡て巴里外国宣教会の司牧に委ねられ、司祭は皆フランス人であるが、この六甲教会だけは、イエズス会の所属で、ドイツ人司祭が司牧している。

垂水教会の設立

又神戸の西部は稍辺ぴの土地ではあつたが、年と共に次第に住宅地として発展を初ゆつゝあつたので教区ではこれに着目、かたがたこの地区の信者の便益のためにも必要性が痛感されたので、垂水町に一つの教会を設けることになり、昭和十七年（一九四二年）十月西垂水町端ヶ丘九六一の地に土地を選び教会と司祭館を設置した。初代の主任司祭は福田豊神父が当られている。その後昭和二十一年（一九四六年）には主任神父ベルゼス神父の手によつて八十人を収容出来る木造モルタル塗りの聖堂を建設した。又それからこの教会は次第に信者数も増加して来たので、昭和三十五年頃に至り、時の主任司祭タベルニエ神父は、新聖堂建設を企画し、一時仏国へ帰られて種々努力の結果、募金に成功し、垂水信者の協力もあつて、昭和三十七年（一九六二年）に建設工事に着手、十二月には鉄筋コンクリート造の近代式聖堂を完成、十二月八日、聖母無源罪の祝日に田口大阪司教の司式により盛大に献堂式を挙行された。昭和四十年現在信者数は四百十三名を数えるに至つている。

忘れられぬ戦争の犠牲

垂水教会が創設された頃は、日本は日支事変から、大東亜戦争（太平洋戦争）へと突入し、昭和十六年十二月八日（聖マリアの無源罪の祝日）には米国を初めとする連合国に対する宣戦布告がなされ、その日の未明には、真珠湾の攻撃が開始されたのだつた。それと同じ日にマレー半島には日本軍が上陸、破竹の勢でシンガポールに攻め入り、これを陥れ、東南アジアの重要な都市はすべて日本軍の占領下に収められ、ニューギニアは言うに及ばず、ほぼ三年に近い間に、皇軍は遠くビルマからインドの国境にまで進出、至る所連戦連勝の戦果を挙げ、国民のすべては戦勝の歓喜に酔つていた。而し、敗退した米英を主とする連合国軍はいつまでも、そのまゝ引きさがつて行く筈はなかつた。やがて自らの国内の軍事力の充実に成功した米国は、俄然攻撃に転じて日本軍へと反撃を開始することになつてくるのである。日本軍の最初の敗退はニューギニアのガダルカナルに始まつた。そして次いで、ミッドウェイの大海戦の敗北によつてそれは確実なものとなつて来た。昭和二十年に入つて、米軍はついに日本の国土である沖縄についに上陸し来たり、日本本土に対し、至近の距離にせまつた彼等は遂に吾等の胸に白刃を擬したのである。その頃になると東京。大阪を初め日本の主要なる都市に対し爆撃が間断なくつゞけられ、

木と紙でつくられた日本の家屋は実に易々として燃えつくされて防ぐに手はなかつた。

神戸の市街もその類に洩れず三月頃から、焼夷弾の洗礼をうけつゝあつた。六月に入るといよいよそれは熾烈となつて、五日の爆撃はついに教会の建造物に対してまで被害を与えることになつて来たのである。つまり中山手教会がまづその槍玉にあげられた。

フアジュ神父殉職

六月五日未明より米軍機の来襲があり、空襲警報が鳴つたので主任フアジュ神父は一同と共に、山手の壕に待避した。すると突如、頭上の飛行機より投下された焼夷弾の幾発かゞ聖堂に落下し来たつた。屋根をぶち抜いた焼夷弾は内部に火をまき散らし、忽ち聖堂から白煙が吹き出した。それを見てとつたフアジュ神父は助任ウンテルワルド神父及伝道士古屋芳之助氏（現古屋京都司教の厳父）夫妻と共に聖堂にとつて返えして、消火につとめようとしたが、煙にまかれて、思うに任せず。ウンテルワルド神父は漸く聖体を奉持してよろめきつゝ堂外に出たが、手足頭面にひどい火傷をうけていた。而しフアジュ神父と、古屋氏夫妻の三人はついに帰らず、焼け落ちた聖堂と運命を共にしてついに壮烈な最後をとげられたのだつた。燃え残る火の中、聖マリアの祭壇の前に悲しい三つの遺体がうづくまり、涙と共に収容された。フアジュ神父行年七十五才、実にその死まで四十九年間を、居留地教会から中山手教会へ、一貫して神戸外人の司牧につくされて生涯を終えられたのだつた。

下山手・住吉の戦禍

一方下山手教会ではペリン神父帰天後はウンテルワルド師が主任となつたが、やがて都田耕造神父にその任をゆづられていた。その教会も中山手教会炎上と同じ日、六月五日に矢張り爆撃をうけた。都田神父は木本伝道婦を励ましつゝ聖堂の防御に力をつくし、祭壇に落下した焼夷弾等二ヶ所の発火をいち早く消火し、炎上を喰い止め火災はのがれたが、司祭館に落下した焼夷弾はついに防げず焼失の止むなきに至つた。

神戸に於ける爆撃による被災はこれだけに止まらなかつた。住吉教会も同年八月六日未明より初まつた爆撃によつて聖堂は数発の焼夷弾を受け必死の防火も空しくついに炎上の憂目に会つた。而し以上の外は神戸市内の教会では著しい被災はなかつた。又、中山手教会にては三人の貴い人命が失われたが、下山手教会、及住吉教会では幸い死者は出なかつたのが不幸中の幸いである。焼けた中山手聖堂は内部と屋根をすつかり失つて、たゞコンクリート外壁のみの廃墟となつたが、昭和二十三年復旧に着手、二年を要して昭和二十五年には祭壇の後部を少しく拡げて現在の姿に建

て直されている。下山手教会は、司祭館焼失の跡に、米軍提供のカマボコ兵舎を建て司祭館としたが、後になつて現在の所に新司祭館が建てられた。住吉教会は聖堂焼失後、伝道館を仮聖堂として永らくミサが行われたが、司祭、信者の努力が実つて昭和三十一年十二月には現在の姿の新聖堂が復興建設された。

戦後の発展

さしも熾烈だつた戦争も昭和二十年八月十五日被昇天の祝日に至つてついに終り、日本の敗北となり、平和の光りがやがて国土の上に輝き出すと、日本の人々は今度はその精神的より所を見失つて虚脱の状態に陥つてしまうのであつた。こんな時に戦争中くもらされていたキリスト教の光りがやがて日本の行く手に一つの燈台として認められるようになつてくる。カトリックの活動が活潑になり、精神的に飢えた日本人が続々とカトリックの門に集まつて来ることになつた。復興が緒につくと同時に教会の動きも大きくなり新しい教会が建設され初めて来た。まづ芦屋市に教会がつくられることになり、同市平田町の稲畑二郎氏邸に芦屋の仮教会が設けられることになつた。稲畑邸は幸い戦災を免れた豪壮な宅であつたのでそのサロンに祭壇が置かれ、日曜日には上仲儒利神父が夙川より来てミサを執行され、住吉教会の一部信者はそれに参詣した。それが基となつて後程に芦屋公光町（現在の場所）に立派な聖堂が建てられることになつたのであを。

又明石方面にても早くから教会の必要性は感ぜられていたので教区では昭和二十五年（一九五〇年）八月二十二日太寺に教会を開設し、初代の主任神父にはジュピア師を推して初ミサを執行した。その後更に広い土地を求めた結果、明石市桜町二番二十六号にこれを定め、聖堂の建設に当り、昭和三十一年一月には完成した。

市内に三教会増設さる

又、神戸市内にも次第に増加して来る信者に対処して、教会の増設が要求されて来たので、まず灘区に設けることが決定された。その場所としては灘区籠池通五丁目一〇の土地を購入した。この土地は元中国人の豪商、呉啓幡氏が眺望絶佳の山麓に営んだ宏壮な邸宅で、惜しい哉戦災によつて灰燼に帰してしまつたものであつた。そこで教区ではまづその中の上部に焼けずに残つた二階建日本家屋を仮教会として使用することにし、昭和二十六年（一九五一年）十一月一日、初代主任司祭メルオー神父によつて初ミサが上げられた。当初信者は一〇〇名であつたが、昭和三十二年（一九五七年）に至り漸く信者数も増えて来たので聖堂新築を行うことになり、昭和三十三年四月これが完成したので教皇庁公使フルステンベルグ大司教を迎えて、十六日献堂式を行つた。時の主

任神父はモラ神父であつた。

又同じく須磨にも教会が設置されたが、それは同じく昭和二十六年十二月の事で須磨本町四四番の場所に日本家屋を求めてそこに仮教会を初めた。初代主任神父はモネ神父、信者数は百名であつた。又この教会も時代の要求に応じて本教会の設立を行うことになり、土地を須磨区行幸町三丁目二八に定めて、聖堂建築にかゝつたが、これが完成し、昭和三十五年（一九六〇年）十二月献堂式を挙げたが、コルニク神父が主任代理をつとめ、翌年二月には初代主任としてメルシエ神父が就任された。信者数は一二二人となつていた。

更に下山手教会と鷹取教会との中間の教会として兵庫地区に教会の必要性が認められていたので、昭和三十年頃より教会は兵庫区塚本通四丁目五番地に相当広い空地のあるのを見つけていたのでこれを買入れていた。そこに日本建の家屋もあつたので最初は下山手教会より毎週神父が出張してミサなど行つていたが、昭和三十五年（一九六〇年）二月にはジュッセン神父が初代主任司祭として初ミサを捧げている。その時信者の数は二〇五人であつた。又この教会にも本聖堂の建設が要求されていたが、昭和四十年には建築に着工し、八月一日には献堂式が行われた

むすび

以上列記のようにかくして神戸市内には今日九ッの教会が存在して、信者の数も、著しく増加した。神戸（兵庫）開港と同時にムニク神父が上陸第一歩を印して布教を始めてから、本年にて丁度九十七年を迎える。その間神戸の地区は終始一貫して仏国巴里外国宣教会（ミッション。エトランジェ。ド。パリ）の宣教師に司牧されて来ている。今日の日本カトリックの開花の基盤はすべてこの会の会員達の努力の賜であつたことは吾々日本人として忘れられない所である。しかもその人達は遠く故国をはなれ、苦労しつゝ日本語を習い、日本人に教えをのべ、最後は日本の土となつて帰天する決心をもつて来ているのである。日本人から見れば何んと尊い事であろうか。最近になつて受洗入信された方の中には、この辺の事情をあまり知られない方が多いと思われたから私は敢えて筆をとつてこれを明かにする必要を痛切に感じた次第であつた。外国より渡来している宣教師の使命は、その国に教えをひろげると同時に又その国人の中より司祭を養成して、将来はこれらの邦人司祭に、その国の信者の司牧を任せるのが仕事である。現在では日本に十五人の日本人司教があつて管轄して居り、邦人司祭もおびただしい数になつているのも皆凡て、元はと言えば巴里ミッション会の縁の下の力持ちによつて出来た事であつた。この機会に私達はこの宣教師たちの精神をくんで、邦人司祭の養成に力を入れるべきであると思つている。（終）（教会委員）

神戸カトリック教会年譜

慶応四年（一八六八年）六月　神戸開港後直ちにムニク神父初めて神戸に上陸、元町に礼拝所を設け、天主堂建設と、布教を開始す。

明治三年（一八七〇年）四月　居留地仲町三十七番に聖堂完成、献堂式を挙行。

明治四年（一八七一年）十月　ムニク神父急死、その遺骸は聖堂の祭壇下に納められた。後任にはヴイリヨン神父が迎えられる。

明治十年（一八七七年）七月　神戸に最初の修道女四名（フランス幼きイエズス修道会）上陸、直ちに居留地四十一番にて孤児院を始める。

明治十二年（一八七九年）十月　ヴイリヨン神父京都に初めて教会を設立するため京都へ、後任にはシヤトロン神父が就任。

明治十八年（一八八五年）　ペリン神父は生田区多聞通鎮台筋に一軒借家を借り初めて日本人のための説教所を開く。

明治二十九年（一八九六年）三月　ワスロン司教急逝されたので、後任にシヤトロン師司教に任ぜられ、大阪川口教会に転ぜられる。後任にはファジュ神父が就任、日本人のためにはペリン神父が主任となり、兵庫区西出町四七八番地に仮教会を設ける。

明治三十二年（一八九九年）十月　神戸市長に対し、下山手通七丁目の神戸監獄跡の地所払下げを願出る。

明治三十四年（一九〇一年）四月　神戸監獄跡地所払下の件許可さる。

十一月　右同地所に司祭館完成し祝別される。この時よりペリン神父この地に居住する。

明治三十五年（一九〇二年）　四十二坪の伝道場兼仮聖堂完成、毎日曜日ミサには信者多数参詣。

明治四十二年（一九〇九年）二月　天主堂の定礎式行わる。

明治四十三年（一九一〇年）九月　天主堂完成し、献堂式盛大に行わる。

大正七年（一九一八年七月　日本人のための本格的聖堂として神戸に初めて建立されたもの。
大正十二年（一九二三年）十二月　シャトロン司教死去されたので、後任にカスタニェ司教叙階任命さる。居留地仲町三十七番の聖堂は老朽したゝめ中山手に土地を求め大正十一年より工事を起した新聖堂が完成し、献堂式を挙行。
昭和二年（一九二七年）四月　鷹取教会設立、献堂式挙行、初代主任ジュビア師。
昭和三年（一九二八年）七月　古屋義之（現京都司教）故都田耕造の両師下山手教会にて神戸最初の叙品式行われ司祭となる。
昭和十年（一九三五年）三月　小林有方（現仙台司教）師下山手教会にて叙品式行われ、司祭となる。
昭和十年（一九三五年）五月　兵庫県武庫郡御影町申御田に御影教会設立、初代主任神父メルシェ神父就任。
昭和十一年（一九三六年）十二月　御影教会は新たに住吉町丸の後に土地を得て移転し、こゝに聖堂完成し、住吉教会と称す。
昭和十七年（一九四二年）十月　垂水教会設立、司祭館建設、初代主任福田豊神父。
昭和十八年（一九四三年）三月　カスタニェ司教死去さる。
昭和二十年（一九四五年）六月　戦災を受けて中山手教会聖堂焼失、下山手教会司祭館焼失。中山手教会聖堂焼失の際、主任フアジュ神父及古屋司教両親の三名聖堂内にて悲壮の死。
八月　住吉教会聖堂戦災のため焼失。
昭和二十三年（一九四八年）　六甲教会設立。
昭和二十五年（一九五〇年）八月　明石教会設立。
昭和二十六年（一九五一年）十一月　離教会設立。
十二月　須磨教会設立。
昭和二十八年（一九五三年）五月　六甲教会献堂式
昭和三十五年（一九六〇年）二月　兵庫教会設立。

住吉の思い出

ベロー神父

住吉教会の思い出について何かと書くように求められましたが、実は少し当惑しております。それには理由が二つあります。先ず、年と共に輪郭のぼやけてしまったのがあって、これを書き表わすのは難かしいことでしょう。もう一つの理由は、思い出があまり沢山あることです…。そのうちのどれを、こゝに書いたらよいか、本当に迷ってしまいます。偶然な出会い、一つの言葉、一つの石、一本の木、などから思い出が浮んできて、誰かの顔が現われたりします…。こんなことをこれから少しのべてみようと思います…。

教会の、一つ一つの物には、それぞれのお話があります…

先ず、いつか持ってかえってきたあの二本のヒマラヤ杉があります。

あれからは、十四年も過ぎたのです！。それは日曜の午後のことでした。その時私はまだ甲南病院の裏を知りませんでした。私は数人の子供と（彼らは皆結婚しました！）一緒に、出かけました…そしてこの遠足で、私は極く小さいヒマラヤ杉（高さ5センチ）を五本持ってかえりました。うち三本は枯れ、あとの二本は少くとも三回位は植え変えられたにも拘らず、現在殆んど五メートルに成長致しました。私にとって、この二本の木はいろんなことを語ってくれます。ある日曜の遠足だけでなく、その杉の間から私にはいろんな人の顔が思い出されてきます。いろんな人の名前が浮んでまいります…。

又、ルードの洞窟の石があります。前方に見える立派な石ではありません、後の方で壁をつくっているあの見えない石です。その石の一つ一つにはお話があります、そこには血と汗さえあるのです…私を手伝って下さった方達は覚えているでしょう、しかしそのうち、三人の信者が天国へ旅立ってしまいました。この三人はきっとマリア様から御礼を言われたことでしょう。見えない石なんで、たいしたものではありません…それでもその石について少しはなしたいと思います。

市が、道路の巾を広げた時、教会の土地を大分削られました。

その代りとして、教会の今の神父館の西にある畠をもらいました……。それは戦後のことで、その畠の真中には、瓦や、コンクリートのかけら、それに空襲で死んだという馬の大きな骨さえ混つて、山ができていました。私はこゝを少し整理しようと思つて、穴を堀りました……穴を堀ると、時には宝物を発見するものですが……。宝物の代りに、私は旧い川を見つけました。きちんと三角に削られた立派な石が、川の両岸に沢山ありました。その時は、夏でしたので、夜になると近くの信者があつまつて、仕事を手伝つて下さいました。やがて、美しい石の山が出来ました、その時ふと、私はこれでルルドをつくることを思いつきました。この石は全部、ルルドの後の壁に使用されました。

それ以来、ルルドの前で祈る度に、私は当時信者と一緒に働いたあの日々を思い出さずにはいられません。私は前の方の石だけを見ているのではありません、後の見えない石のことを考えています。その度に、私を手伝つた人々、生きている人も、亡なつた人も、一人一人の顔が私の眼前を通り過ぎるのです。

それから、道路を広げた時に移動された夾竹桃があります……。経済的な理由で植木屋を頼むことができなくて、私は青年達に助けられていく日もこの仕事につかいました。一緒に働いた青年は覚えていないかと思いますが、そのうちの一人が（今は結婚して父親になつています）、私は〝サムソン〟というアダ名をつけました……。この人は旧約聖書をよく読んでいたと見えますが、今でも忘れないでいてもらいたいものです〃

他に、教会に活気を与える沢山の木があります……。これらの木は、私にとつては唯の木ではありません。その中には、いろんな人の顔や思い出がかくれています。勿論これは木と私との秘密ですから、木の秘密を語る訳にはゆきません。しかし、

―この木は、神様に感謝するために、こゝに植えられた……

―こちらの木は、ある結婚記念のものです……

―こちらのは、マリア様を讃えて植えられました……

―この小さな赤い花は、ルヽドに色をそえるためにと、ある土曜日の夕方持つてきていただいたものです……

こうしていくらでものべることができますが、とても書ききれません。それに、司祭として語ることのできないこともあります……それと神様とマリア様に申しあげれば十分でしょう。

又、皆さんが教会のためになさつた数々の賜物があります。大きいのも小さいのも、品物もあれば現金もありました。三十年の間、信者の心づくしは蓄積されております。そのうちのある物は神父と一緒に教会を離れたでしょう、ある物は残つているでしょう。しかし変らないのは、神様が総てをよく知つていることです。誰がこのテーブルを、この椅子を、このコップ、この灰皿、を持つてきたのか、神様はご存じです。

信者の努力によって、教会は現在の姿になることができました。私達の後に来る神父達は、あるいはあなた方の名前を知ることがないかも知れません。しかし神様は知っています。皆さんが神様の家と、神父達のためにつくしてくださいましたことを、神様は知っています。

私が残念に思うのは、細かいことをいちいち思い出せないことです。

記憶に深く刻まれた思い出もあれば、私の守護の天使の持っている私の生涯の本に書きこまれた思い出があります。天国で再会した時に、私はきっともっと正確に、一人一人に感謝をのべることができると思います。

私の回りに見える総ての物に、顔がかくれています。その顔は生き生きとして、あなたの今の顔でなく、当時のまゝの顔なのです。十二年前の台風の時の人々の顔、慰めに来た信者の顔。その二日後、屋根のない聖堂の御ミサに集まった人の顔、被害を修理に来た人の友情に満ちた顔。御聖体を持って行った時の病人の顔。公教要理を勉強していた貴方の顔。子供を亡くした母親の悲しみに満ちた顔。私を誤解した人の厳しい顔。これらの顔は、皆大切に私の心の中にしまわれていて、毎朝、神様にお見せしているのです……。

ながいおしゃべりをお許し下さい。信者と神父の三十年間の努力……神様はよく認めて下さるでしょう。皆さんに神様の祝福がありますように、喜びが与えられますように祈っております。

皆さんに申上げたいことを全部書いたら、おそらく一冊の本になるでしょう。とてもこゝに書きつくせませんが、総てを御存じの神様は、貴方のことを忘れません。……私のためにもどうかお祈り下さいますように。

住吉にて

一九六五年十月十八日

（現主任司祭一八代目）

男女関係の変遷

教会での男女関係のあり方のうつり変りも大きなものがある。「男女七才にして席を同じうせず」は教会でもそのまゝ三十年前までは厳重に守られた。一例を聖歌隊にとってみると、ペリン神父は男女合唱は絶対に許されなかった。男は男だけの聖歌隊、女は女だけの聖歌隊で全く別個の無関係、而かもミサ中でも、男は二階に席をとり、女は階下に席をとり、交互にグレゴリアンを歌うのだ。勿論稽古は全然別。それでもうまくやれた。今は青年でも男女は一緒に何んでもやるが昔は、男女が共には何にも出来なかった。ピクニックなど全く以っての外。時代の変化も恐ろしい。

住吉教会と私

思い出すまゝに

デーラ神父

住吉教会の主任神父は創立当時はよくかわりました。その頃大阪教区の司祭は全部で三十名位だけでした。その中、邦人司祭は六名（永田、浦上、山中、都田、古屋（孝）、小林の各師）ミッション会の司祭は二五、六名でそれも大方が年寄りでした。又最初の頃の大阪教区の管轄区域は三重県の桑名から山口県の下関までで、非常に広範囲でしたから誰か司祭が一人病気になるとか休むとかの時には、すぐに若い司祭の大活躍となつていました。ある日曜日、御ミサのために大阪の川口教会から和歌山に行き、そのあと津教会、伊勢山田、四日市、桑名と次々に六ヶ所も飛び廻つたことがありました。又その頃は司祭の移動も激しく、三年間に小林神父様（今の司教様）は六回、私は三回もかわりました。

私は司祭になつてからマレー半島のピナン神学校で四年半哲学を教えた後、布教活動にたずさわつてもよいと云う許しを得て、日本へ向けて出発し、昭和十年十二月、神戸に着きました。

御影教会（住吉教会の前身）はその年の四月に創立されたばかりで阪神御影駅の近くの仮の教会でした。カスタニエ司教様によつて私は先づこのメルシエ神父様のところに来ました。司教様はメルシエ神父様を、私が先輩の神父様方に挨拶して廻るための案内役にされ、メルシエ神父様につれられて、あちこちの教会を廻り、その夜は御影教会で泊りました。

日本語の勉強は鷹取教会のジュピア神父様の許で指導を受けました。日曜日には中山手教会へ行つてファジュ神父様を手伝い、朝遅い十時半の御ミサを立てていました。午後は時間があつたので阪神電車で御影に来、メルシエ神父様と散歩していましたが、御影に着く頃は大てい日曜学校がまだ終つていませんでした。先生は尾形竜子さんのお姉様で今聖霊会のシスターになつて居られる中村文子さんや時には和田実伝導士も教えていました。日曜学校が終るのを待つてメルシエ神父様と散歩に出かけ、よく甲南病院の方まで歩きました。（あの頃バスがありませんでした！）。団地もなく静かでした。東へ廻り住吉川に沿つて帰つていましたが水害前まで川べりには松の木が沢山ありました。

昭和十一年大阪川口教会のピロース神父様が重病になられたの

で、カスタニエ司教様がそこの主任司祭を兼任され、非常に多忙になられたため、私を川口へ呼ばれて、日本語の勉強を続けながら少しづゝ布教にたづさわるように言われました。阪大病院に入院して居られたピロース神父様に毎日御聖体を持つて行きました。ピロース神父様はだんだん快くなられましたが、今度は南田辺教会のベック神父様がパリ神学校の先生となつてフランスに帰ることになりました（昭和十一年四月頃）。南田辺教会では近くにある愛徳童貞様の修道女のために誰かゞ毎朝御ミサを立てなければなりません。それで司教様は私を、まだ日本語がとても不充分でしたが其処へ任命されました。主任司祭としては堺教会のセッール神父様でした。セッール神父様は月に一回、日曜日に私と交替して南田辺に来て居られました。南田辺の信者はその時に神父様に色々相談が出来ました。又セッール神父様は毎週一度愛徳童貞会に来て居られましたから、その時教会に集まつて私のためにむづかしい問題の解決など力を借して下さいました。

こうしている中、夙川教会の永田神父様がミサ中突然倒れて、急逝されました。カスタニエ司教様は色々考えて次の移動を決められました。メルシエ神父様を夙川へ、私を住吉に、ウンテンワルド神父様を田辺に。このようにして私は初めて住吉教会の主任司祭となりました。（昭和十二年）。

二回目は昭和十八年、三回目は昭和二十九年。病気のあとフランスから帰つた時でした。

田辺にいた時は、カスタニエ司教様のプランで毎日中村伝導士と日本語の勉強をしていました。日曜日の説教はまづフランス語で書き、中村さんが翻訳するのを暗記していました。住吉に来てからも和田実伝導士と同じようにしました。月曜日に説教の原稿をフランス語で作り、それを和田さんに渡して、和田さんが翻訳したのを暗記していました。又他の日は毎日午前中は日本語の色々な勉強、午後は和田さんと信者の家庭訪問と言う日課でした。その頃住吉教会の所属区域は東は今の芦屋市の西から、西は六甲の都賀川までした。それで六甲道まで国電で行きそれから大分上まで歩いて廻りました。

日曜日の御ミサにあづかる信者の数は凡そ三～四十人でしたでしょう。川端さん、椎山さん、近藤さん、松本さん、熊沢さん、青木さん、市野さん、難波さん等、それにフランス製の自動車で来ていた小高さん。

御影教会は下山手教会と夙川教会の堺で両方の教会から半分づつ集まつて出来た教会ですからまだ昔の古巣の夙川や下山手に行く信者もありました。非常時の始まる頃でした。

その頃教会で盛んだつたのは聖歌隊でした。和田伝導士、榊原、村上さんの三人は共に暁星学院の出身でしたからグレゴリアンに大変興味をもつていました。村上さんがリーダーになつて、姉妹

会の人達も大勢加わつて立派に歌つて居りました。オルガンは中村文子さんが弾いていました。御ミサの後、長い時間練習していましたが時には榊原さんの家に行つて遅くまで練習することもあつたようです。メルシエ神父様の時代に一度御影公会堂で音楽会をし、又後に住吉の吉田会館でも一度しました。

一般信者の公教要理は和田伝導士がしていました。仙台教区長の小林司教様はその頃、大阪川口教会の助任司祭だつたと思いますが毎月一回住吉に来て頂くことにしました。神父様は喜んで応じて下さり、差支えのない日曜日の午後来て、主に青年達に聖書研究会をして下さいました。みんな喜んで参加していました。

その頃イエズス会の神父様は芦屋に家を借りて、中学校を設立するために土地を探していましたが、六甲山の中腹に適当な土地を買つて第一の校舎を建設しました。

下山手教会のペリン神父様は老令のため一人では布教活動がむづかしくなつたので司教様にお願いしてウンテンワルド神父様の応援を求めました。それが又移動のもととなりました。ウンテンワルド神父様は田辺から再び下山手に来、私は又南田辺に行くことになり、今度はモラ神父様が住吉に来ました。モラ神父様はお気の毒にも住吉に来て一ヶ月程の後にあの大水害に会いました。

私は田辺から少しの間玉造に行き、それから中山手に来て、三年間ファジュ神父様の所で働きました。中山手では主に乗船下船する司祭の世話をしました。

大阪教区が田口司教様の担当になり、カスタニエ司教様は教区長を辞任された後、住吉教会の主任司祭として、ここで司牧に当つて居られました。ビロース神父様が助任司祭でしたが老令で病弱のため司教様は西村神父様をお呼びになつて特に子供の公教要理を頼んで居られました。昭和十八年二月カスタニエ司教様は急に悪くなり、神戸市内のドイツ人医師ドクター。ジルヌの病院で三月十二日に帰天されました。そのあと田口司教様の任命によつて私が又住吉の主任司祭となりました。以前川口教会にいた時ビロース神父様と一緒でしたし、又南田辺では西村神父様と一緒でしたから三人は親しく仲良く生活しました。

大東亜戦争が日に日に激しくなつて、西村神父様は柊さん達と一緒に日曜日は住吉小学校に行つて軍事訓練を受けて居られました。そして遂に西村神父様にも招集令状が来、出征されました。信者の数はへるばかり。防空訓練も頻繁になつたので日曜日の御ミサに与る人は僅かになりました。食糧事情もひどく悪くなつたので教会の空地は全部畑にして、上の段は近所の、特に信者の方のために、下の段は神父と伝導士、まかないさんの分としました。

聖堂の前には中里さんの主人（故人）が中心となつて大きな防空壕を堀りました。（爆撃のことは既刊の「すみよし」に書きましたからそれを御覧下さい）。昭和二十年三月から空襲の回数は

頓にふえたので、日曜日の御ミサの時間を、近所の方達だけでもあづかれるように、早くしました。五月十一日の青木方面の空襲で信者の方が二人亡くなりました。テレジア永瀬ちかさん（五十六才）は会社の食堂で、ペトロ日笠あきのりさん（十四才）は学徒動員で工場で働いていた時、空襲のため家に帰る途中、国道甲南停留所近くで爆弾の破片を受けて亡くなりました。又六月十日の空襲では住吉教会区域の西半分が大方焼けました。こゝでも信者の中に死者が出、高木さん（年不明）という方は隣組の組長で他の負傷者の世話をしている時直爆弾を受けて臨時怪我人収容所になつた成徳小学校で二、三日後に亡くなりました。都田神父様から終油の秘跡を受けられたと思います。御影ではマリア近藤よし子さん（十六才）、テレジア塩路かづ子さん（同年令位）も亡くなつています。同じ日中山手教会でファジュ神父様と古屋さん御夫妻（古屋司教様の御両親）が亡くなられました。八月六日の住吉附近の爆撃では聖堂が焼かれ、近所の信者の家も大部分焼けてしまいました。

やつと戦争が終つて又布教を積極的に始めることができるようになりました。戦災をまぬがれた伝導場を仮聖堂として使い、少しづつ聖堂らしく整え、きれいにして行きました。求道者の数がふえ、信者の家庭に公教要理に出かけるために多忙になりました。西村神父様は復員されましたが大阪の教会の主任司祭となつて行かれました。

昭和二十五年、パリのミッション会総会へ日本宣教区の代表として神戸にいる司祭の中から誰か一人出席することになりました。私が選ばれ、日本管区長のエルベ神父様と共に六月五日マルセイユ号で出帆しました。私のあとにはデュセン神父様が留守番として来られることになりました。私が乗船した日、フランスの私の家では母が亡くなりました。そのことをサイゴンに着いて初めて知りましたが、それは日本を離れる犠牲と共にもう一つの大きな犠牲でした。

ビロース神父様の帰天。
デュセン神父様、休暇でフランスへ。
ペロー神父様の住吉教会付任命。

―　昭和二十九年七月から三十一年十月まで　―

パリ。ミッション会の総会に出席した後、一年間の休暇の許しを受けたので順調なら休みが終る昭和二十六年七月頃に日本に帰る筈でした。所が御存じのように二十五年のクリスマス頃に病気になつて二十六年正月サンテ。エイチエンの病院に入院しなければなりませんでした。入院中病気が悪化して二度危険な状態になりましたが、皆様のお祈りのお蔭で少しづゝ快くなり、ほぼ快復

しました。

昭和二十八年九月に帰れるようになつて、その手筈をしていた所、又再発して今度はパリのパストゥール病院に入院し。治療を受けました。そしてそこでは医者が相談して、或る特別の薬を服用して見て、それが効いたら、その薬を持つて二十九年には日本に帰つてもよいと言うことになりました。

昭和二十九年四月やつとマルセイユ号に乗つて日本に帰ることが出来ました。六月十七日神戸港に着き、皆様の温い歓迎を受けました。帰ると田口司教様からもう一度住吉教会の主任神父になるように言われました。三回目の住吉主任神父でした。二十九年以来住吉で聖務に励んで居られたベロー神父様はその間に台風で壊れた聖堂の移転と改善をし、幼稚園を造るなど随分働いて、疲れていました。私が住吉に戻つた時、大きな溜息をついて、「これからは少しゆつくり出来ると思つた」そうです。

その頃恰度本聖堂建築の計画中でしたし、幼稚園の遊戯室も造つたので資金が要り、それを集める仕事を早速二人で分担することにしました。昭和三十一年八月に愈々聖堂の建築にかゝり、喜んでこの仕事に励んでいる時東京のミッション会本部から手紙が来て、東京にいる日本語を勉強中の若いミッション会司祭の世話をしてほしいと言われました。初めは断りましたが結局承諾して二年間だけ行くことにし、住吉を離れなければなりませんでした。その時から主任神父の務めは終りました。

やがて東京の務から住吉に帰り、又三十八年には、もう一度フランスに帰国しましたが、再び日本に戻つてからも又、住吉教会に住みついて、結局は住吉から離れることの出来ぬ私のようです。

（元主任司祭―現助任司祭）

留守番神父から

モリス。デユセン神父

戦争の苦しい時代の後、大変楽しかつた、浜寺教会から離れて住吉教会に移つた時は私にとつて、それは非常につらい事でした。始めの頃、毎晩の様に、司祭館の二階の窓から、大阪湾の向う岸の浜の電燈の灯を見て楽園から追出された、アダムとエヴの様な寂しい気持でおりました。特に私が住吉教会に移つた理由は、たゞ、デラー神父様が、フランスに、帰つていらつしやる間、留守番をする為と、お年寄りのピロス神父様を守る為だけでした。しかしその寂しい気持は、長くは続かなかつたのです。落着いてから、間もなく信者達の顔や名前を覚えていくほどに、彼等の親切さ、かわいゝ子供達の親しみ等の為に、教会の家庭的なふんいきになれて、浜寺教会の時と同じ様に、過す事が出来る様になり

ました。

住吉教会の留守番として務めたのは、わずか数ヵ月ばかりでした。その間、いろいろの出来事がありましたが、それは簡単に書き印す事は出来ませんから、たゞ私の頭に残っているお年寄ピロス神父様についての出来事を申し上げましょう。

神父様は、フランスのアルプスの美しい山景色にお生れになったので、若い頃から、自然界の中で散歩する事が大変お好きでした。私は日本に来てから二年目に、司教館河口教会において、一年間神父様と一緒に居りました時、度々仙大寺の方に連れられて山の散歩に出かけた事がありました。その時神父様は、口ぐせの様に「日本では、たくさんの鳥がいますが、フランスの鳥の様にしじゅう鳴かないのは、どう云う訳でしょうか」と、いつも繰返しておっしゃっていたので、ある日いたずら神父の私は鳥の声を出す笛を持って、神父様と共に、散歩に出かけました。静かな山道を歩きながら、その笛を鳴らす度に、神父様は驚いて、その鳴き声をさがしながら「今日は鳥が見えないが、こんな美しい声を聞くのは初めてです。」と何べんも、その笛が見つかる迄、いたずらして、神父様をだましたものです。　ずい分お年寄になってからでも、神父様は、毎日の様にロザリオを、唱えながら、杖を持って住吉教会の近所に、ぽつぽつ、散歩にお出かけになりました。

ある晩、夕飯の時間になっても、いつもと違って神父様は、まだ散歩から、お帰りになりませんでした。神父様の部屋から、寝室、食堂、応接間、御堂、庭までさがしても、神父様は、見あたりません。大変心配になった伝導婦さん、まかないさんも私も、近所の道をあちこち、さがしたり人々に尋ねたりして、どこかでお倒れになったのでは、又交通事故ではないかといろいろ心配しながら教会に、戻りました。その時私は何かの用事で、自分の寝室に入って驚ろいた事に、私の寝台の中で、神父様は、気持よく深くねむっていたのです、そしていくら起しても説明しても、なかなか動かなかったので、無理に起して、ご自分の寝床の方へ文句を言いながら、代って下さったのです。

不幸にして、その頃から神父様のお体は、だんだん弱って来て私から終油の秘蹟を、熱心にお受けになり、数日後にお亡くなりになられました。そして御堂で全信者の前で、壮厳なお葬式をもって、神父様は、住吉教会から、お別れになり、天国の永遠の平和と、幸福を、お受けになられたので御座います。

その後間もなく、私も、二十二年ぶりで、初めて国に帰る事が出来ました。その時の、皆さんのご親切な見送り、温かいお言葉熱心なお祈り、船上まで聞えた讃美歌、寒さの中で、手をふって「さようなら」の、かなしい声の響き等が、今でも耳に残っております。私は初めて、フランスに帰るのは、うれしかったのです

が、その時、こんなに親しくなつた皆さんと、別れる悲しみと、一両目から流れて来た、熱い涙を今でも、よく覚えております。

（七代目主任司祭ー現兵庫教会主任）

住吉での私の踏み出し

過去を顧みて。。。

モラ神父

年をとるにしたがつて、人は過ぎ去つた出来事を想い出すのを好みます。それで、度々同じ事を繰り返すことによつて、聴衆あるいは読者もあきあきさせてしまうものです。

が、住吉教会設立三十周年に当り、何か思い出を書くようにとの御依頼に、私は喜んでお引き受けしてしまいました。

私が初めて神戸に着きましたのは、一九三六年十月二五日、美しく晴れあがつた秋の日曜日でした。その時丁度、港の沖合には日本の艦隊が集結しており、天皇陛下は観艦式のためにおいでになられておりました。こうして、私は六週間の旅の後、陛下をお迎えするために美しく飾られ、喜びに湧く神戸の町に下船致しました。

直ちに、十一月一日から、私はジュピア神父様の指導の下に、鷹取で日本語の勉強をはじめました。それから、一年半の間は、これが私の唯一つの仕事になりました。一日七時間、休む間もなく日本語に取り組みました。二五才で子供に戻つた私は、早くこの言葉を覚えて会話ができるようになりたいと心がせいていました。この勉強生活の唯一つの変化といえば、日曜日に、その時は外人専用になつていた中山手教会に行つて、十時半のミサをたてることでした。というのはその時のハァージュ神父様が、司教区の会計係の仕事をしておられたため、神戸に多勢到着する司祭や修道女を出迎えたりするのに忙がしかつたからでした。

一九三六年六月のある日、大阪司教区のカスタニエ司教様が何の知らせもなく、突然鷹取においでになり、私の部屋に入るやいなや、大阪の田辺に転任のデラー神父様の後任として、私を住吉教会へやることに決めたとおつしやいました。

私はまだ日本語を話すこともできず、言われたことも完全に理解できない今、その任務をお引き受けできる自信のないことを、司教様に申し上げましたが、無駄でした。カスタニエ司教様は、住吉教会の伝導士の和田実さんが暁星の卒業生で、フランス語を知つていること、和田さんが私の仕事を助けること、又当時川口教会の助任司祭で現在の仙台司教でいらつしやる小林神父様と、カスタニエ司教様ご自身が代わる代わる日曜毎手伝いに来て下さることなどを、しきりにおつしやいました。又、住吉教会の人は

皆熱心な信者で、きつと親切にして下さることを、司教様は付け加えました。

こうして、力づけられた私は、六月中に住吉に移り、デラー神父様は大阪へ出発され、私は一人になりました。さすがに心配だつた私は聖堂へお祈りに行つたのを覚えております。そこは明るく気持がよく、祭壇の上には聖パウロ三木の絵がかけてありました。

住吉に着任してからいく日もすぎないうち、どしゃ降りの雨が何日も降りつゞいて、阪神間の各所に洪水をおこしました。山から流されてきた岩石で川床を塞がれた住吉川は、その両側にあふれ、急流になつて、家も家具も木も一緒に流していました。

激しい水流のため、教会の北側の塀が崩れて、濁流は神父館の東と教会の間のせまい所を通つて、当時北側の庭よりも低くなつていた南の庭にたまりました。やがて、南側の塀も崩れおちて、濁流は北から南へと自由に通りぬけました。

教会の東北の角にあつた伝導士の家は、半分流されて、実さんとマリアさんは赤ちゃんだつた幹夫さんを抱いて、神父館に避難してきました。そうしているうちに、教会の北の方の数軒の家から叫び声が聞こえてきました。その家の二階の窓から、婦人や女中さんが救いを求めているのでした。家の階下は流されてしまつて、柱だけが残つていて、それも今にも流れてしまいそうな危険な状態になつておりました。和田さんと私は、二階の窓から婦人達を助け出して、神父館の二階に避難させました。夕方、それぞれの御主人が帰つて来て、婦人達を迎えに来た時には、教会の二階の避難者は約十五人にもなつておりました。

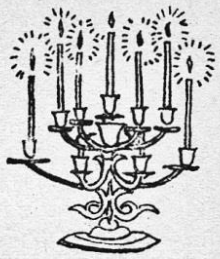
翌日、大阪から被害の状態を見にいらしたカスタニエ司教様は、被害の大きさに驚いて、早速修理の手続きを取つて下さいました。それから少したつて、気持が落ちつくと、司教様は冗談をとばしておつしやいました。「たいしたものだ！　住吉に来たと思つたら、何もかも壊わしてしまうのですね、貴方は！。」

これが住吉教会での私の踏み出しでした。幸にしてその後はもつと快いものでした。私は今も、感動なしではこの教会のことを思い出すことは出来ません。

須磨にて

一九六五年十月七日

（三代目主任司祭―現須磨教会主任）



思い出

和田マリア

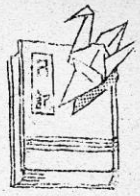
私がはじめて住吉の教会を訪れたのは、昭和十二年三月十六日でした。広い庭には芝生が整然としきつめられ、純日本風の聖堂には正面にカミシモを着た、聖ポーロ三木の壁画がかゝげてあり、なつかしい思い出の聖堂としてわすれることが出来ません。当時、事業部と聖歌隊、姉妹会の方々が何かと教会のためお手伝い下さり、特に聖歌隊は、村上義夫氏、故人となられた榊原穂氏等オルガニストは、尾形竜子様のお姉上中村福子様でした。親ゆづりの才能でとてもお上手で立派な聖歌隊としていつも私等を神の国へ誘つて下さいました。主任神父様はよく転任になりいろいろと思い出を残されておりますが、昭和十三年七月の山津波には教会が濁流の真只中にさらされ、モラ神父様と主人が近所の人を救助して、新聞雑誌にのせられて、知事さんからも表彰されました。丁度その時パン屋さんが、司祭館に配達にきて帰えられなくなり、私達は天のお助けとばかりよろこんで、すき腹を充たしたことでした。カスタニエ司教様は、長男の幹男を時々散歩の相手に住吉川の方まで連れて行つて下さり孫のように可愛がつて下さいました。雨の降る日など大きな傘をさして後からチョコチョコついて行く姿など今だに忘れられません。思い出は次々と尽きませんが住吉の教会は昔も今も変ることなく暖い家庭的な教会としてますます栄えていることはまことにおよろこばしいことでございます。

終りにのぞみまして、いつまでも忘れることなく私を思い出してお招き下さいます、神父様、信者様方に厚く厚く御礼申し上げます。又十二月十七日にローマの聖ペトロ大聖堂で司祭に叙品される筈になつております幹男のため、精神的、物質的に何かと御援助下さいました方々に誌面をかりて心から御礼を申し上げ、天主様のお恵のますます豊ならんことをお祈り申し上げます。

（元伝道士故和田実氏未亡人）

教会の文章の変遷

教会で用いられている、書物に表現されている文章の変遷をふりかえって見るとまことに興味がある。キリシタン時代に誦えられていた天使祝詞は「ガラサみちみてるマリア・・」とあった。又明治十八年に出版されたヴイリヨン神父著の殉教記「鮮血遺書」の冒頭には「それ玉の緒を鴻毛の軽きに、義をくろがねの重きに置くはもののふの常にして・・・」とある。今の若い人にはわからない。公教要理にしても三十年前までは「罪とは何んぞや・・・」と全部文語で書かれて、昔の人はそれを丸暗記してテストをうけたものだった。今は聖書までも口語となったが。



住吉教会での思い出

松本錦治

自分の家の思い出を書くのはむずかしい。同様に、私にとつて住吉教会の思い出を書くのはむずかしい。住吉教会は、私の生活の中にはいりこみ、切つても切れない結びつきを作つてしまつたから。

幼い頃の記憶の片すみにあつちへひつついたり、こつちへひつついたりして残つている教会でのできごとを拾つて見たい。

一体私が何才ごろのことだつたろうか、多分クリスマスの夜のミサだろう。畳の上にすわり、六畳か八畳敷き位の部屋の正面に祭壇がありミサがささげられていた。ねむたくてねむたくて、起きていようと努力しても、ついうとうととしてしまう。〃イエズスさまがいらつしやいますよ。〃　となりにすわつた母におこされて、白いパンが上げられるのに、頭を下げた。片すみに赤い聖体ランプの光がボンヤリとダブツテ頭の中のイメージに残つている。この記憶は、どうも今の住吉教会ではなく、御影の師範学校前の露地にあつた仮教会のことらしい。今でもあのあたりを通ると、昔の野村医院の角から入つて行く細道に、何となしの郷愁のようなものを感じる。

住吉の畳敷きの聖堂は明るくて、子供心には広々としたなつかしい聖堂だつた。はじつこの入口をはいると細長い土間があり、右手にやや高い段があつて、ふすまを明けると聖堂に入るようになつていた。この土間で三朗（サブチャン先生）が従弟にだかれて洗礼を受けた光景は、はつきりと目に浮ぶ。

聖堂の右手はガラス障子がずつとあり、そのむこうは香部屋までつづく長い廊下があつた。この奥の方に告解の台があつた。子供たちがきまつて告解する時間があつて、ずつと並んだ子供の前を通つて、告解の終わつた者がもどつて来る。〃どうやつた。〃と並んでいるものが聞くと、〃メデタシ三回〃と得意そうに答えるのを聞いて、並んでいるものはみんななんとなくホッとしたものだ。

聖堂は全部畳敷きだつたが、前の方に三列か四列ベンチがあつた。後にすわつていると足が痛いのだが、前のベンチへ行くと、後からニラマレテいるようで、前へ行けといわれても、何とかごまかして後に残ろうと苦労した記憶がある。

献金がまわつて来ると、いつも、母は私に十銭白銅をわたし、私にも入れさせてくれた。ある日渡されたのが五十銭銀貨だつたので、大きな声で〃きようは五十銭？〃とやつたら、あとでしかられた。

祭壇は、正面に聖パウロ三木の絵がかざられた明るい感じだつ

た。〃待者をしなさい〃といわれるのがいやで、何とか逃げようと考えた。ともかく、赤い待者服がはずかしく、いつまでたつても、いつ本を運ぶのか、水を持つて行くのかわからず、とんでもないときに鈴をならして、耳の先まで赤くなつたことがある。和田幹男さんが、お父さんといつしよに、ちよこちよこやつているのを見て、いつも感心していた。まだ三才位だつたろうか。

香部屋は、祭壇のまうしろに当るところにあり、かなり広かつた。祝日の前の日曜日に、いつもの仲間の悪童とローソク台ミガキを手伝つていたとき、二人で香部屋の床にローソクをみがきこんで、ツルツルにした。だれもすべらないのでがつかりしたことがある。

今、聖堂のある場所に、昔、娯楽室と呼んでいた広い畳敷きの建物があつた。空襲の後一時聖堂になり、台風でこわれた建物だが、小さな舞台のようなものがあつたようで、公教要理はここであつた。何を習つたか、一向におぼえてないが、ずい分やんちやな悪い生徒だつたらしい。休むとしかられるので、仕方なく、出席の方は優秀だつたらしい。クリスマスに、信者みんなでパーティがあつた。出席のよい順に子供が並び、クリスマス。ツリーにぶらさがつたプレゼントを一つづつもらうことになつた。一番先に、一番大きいのを取つたら、皆に大笑いされて、はずかしかつた。あとで開けて見たら、タバコ入れだつたので、がつかりしたのは忘れられない。

× × ×

カスタニエ司教さまが、住吉にいらつしやつたのは小学校五年生ごろからだろうか。ひげと目が印象的だつた。目はいわゆるきつい目ではないのだが、目から光が出るという表現がぴつたり来るような、子供には恐しい目だつた。ミサにおくれてお説教のときに、後のフスマをソロソロ開けて入つて行つたとき、〃きつ〃と見られてこわかつた。おひげはあごの下に左右に分かれた三、四センチ位のちぢれたひげで、めずらしく、いつも〃ひげをなぜられるときは両手をお使いになるのかなあ。〃と思つて見ていた。

ビロース神父さまは、ずい分おじいさんでいらつしやつた。いつも子供に話しかけてくださつたが、おつしやつてることがよくわからなかつた。平生は三ミリ位の厚さの眼鏡をかけていられた。待者をしていると、ミサの最中に、何か〃くしやくしや〃とおつしやる。一体何とおつしやつたのかさつぱりわからないが、ともかく香部屋に行つて、別の五ミリ位もある厚いレンズの眼鏡をもつて来ると、それに代えてミサをささげていられた。子供たちに大きなカレンダーぐらいの図解を持つて来て公教要理をしてくださつた。あんまりわからず、ポカンとして聞いていた。

西村神父さまのころ、ある日、子供をピクニックにつれて行つてくださるというので教会へ行つて見たら、私一人だつた。西村

神父さまと二人で六甲学院まで行き、そこからもう一人の神父さまに案内してもらつて、裏山の沢へ行つた。神父さまに飯盒で食事を作つてもらつて食べた。いつしよに来てくださつた神父さま（神学生だつたのかも知れない）がクラリネットか何かを吹いてくださつた。なんだか、ものすごくぜいたくな遠足をしたようでいまでも得意に思つている。

× × ×

子供のころの思い出をつづつているうちに、次から次へといろいろなことが頭の中にめぐつて来た。出て来るままに書いてみたが、思い出の一つ一つの中に、神の深い恵みのしたたりを感じ、それをかみしめながら感謝が心にわき上がつて来るのをおぼえる。

私の小年時代、教会で、のびのびとすごさせていただいた良き時代に、どれほど、今の私が準備され、育てられたかは、自分では測り知ることができない。

ただ感謝！

三十周年をむかえた、住吉教会に対して、住吉にいられた、また、いまいらつしやる神父さま方、信者のみなさんに、お祝のことばとして、お送りできるのは、この一ことにつきます。

（助祭―住吉出身）東京カトリック神学院

想い出すことども

難波　仁

住吉教会が創立されて今年で三十周年を迎えるとの事で、心よりお喜びを申し上げると共に、もうそんなになつたのかと、感慨無量のものがあります。

私がはじめて住吉教会に来たのは昭和十一年のクリスマスの日でした。その頃幼稚園の友達だつた市野徳郎君の御一家に連れられて新装間もない教会に参りました。丁度今御聖堂になつている所に娯楽室があり、中に入ると大きなクリスマス。ツリーが飾られ、その枝に箱に入つたプレゼントが沢山吊り下げられていて、各自が目隠をした上で、ステツキを手に持ち手探りで当つた箱をプレゼントされるのです。その交換が終ると、舞台の上で家族ぐるみの演芸会が催され、私も徳郎君と二人で〝かもめの水兵さん〟を歌つて御褒美を貰つて意気揚々とひきあげたのを覚えています。

年が改つて、新年早々から市野さんの御宅や家で伝導士の和田さんに公教要理を教えて載きその年の五月十六日に受洗いたしました。其の日は日曜日でなかつたので、何時もよりははやく起床し、登校前に教会に行き、メルシエ神父様に父と共に洗礼を授け

られました。朝はやい御聖堂に人影はなく、祭壇の後に掲げられた聖パウロ三木の手に十字架を持ち、天を見上げている武士姿の大きな日本画の御像が印象的で身の引き緊る様な厳粛さを覚えました。

あの頃も今と同じで御ミサの時、子供達は前の方二、三列に並んでいたのですが、住吉教会に来る迄プロテスタントの教会に行つており、日曜学校で子供ばかりの礼拝に慣れていた私にとつて御ミサの意義が判ろう筈がなく大人に混じつての一時間余は大分閉口させられ、つい隣にいる友達といたづらして騒いでは、御説教中の神父様から注意の舌打をうけ、どちらかの両親がとんで来て別々に分れさせられる、そんなことの繰返しばかりだつた様です。それだけに御ミサの後は解放された様に昼近く迄友達と遊んでいたものでした。

そういえばあの頃の神父様はメルシエ神父様をはじめ皆おひげを生やしておられました、どうして神父様はそうなのだろうと不思議に思つたものでした。そのためか威厳に満ちて、なんとなく近寄り難い感じがしましたが、その目もとは柔和で、お話しすると、とつてもやさしく、つい慣れ親しんでいたづらをしては神父様を困らせたものでした。その神父様方にもいろいろと想い出があります。

先ず初代主任司祭のメルシエ神父様は思索的で、いつみても御本を開いて勉強されていて御話なさるときも、もの静かで、神父様の前ではあまりいたづらも出来ない様な気持になつたものです。

その頃でしたか、カスタニエ司教様が田口司教様に席をゆづられた後住吉教会に滞在されていられたことがありました。大きな身体と大きなお腹それにとつても大きな声で陽気にお話になりました。この司教様の御ミサにはじめてあづかつたとき、大きな紫色の宝石がはめ込まれた指輪に接吻してから御聖体を載いたのが今も判きりと想い出されます。

次に日本に来られて間もないデラ神父様が御赴任になり、家に来られたとき、今、日本語の勉強中だとおつしやつて、姉の持つて来た小学校五年の読本の第一頁を開かれて〃春とはいえ未だ寒く、桜の花は云々〃と漢字もスラスラと読まれた時には神父様はえらいもんだなあと、感心いたしました。

モラ神父様はとても活動的でいらつしやいました、子供と一緒になつてよく遊んで下さり、阪神パーク等に遠足に連れていつて下さつたりしましたが、併し物事にけじめをおつけになり、御聖堂の中では厳しく、ミサ答えの練習中、調子にのつて二、三人でふざけて〃もう来なくてもよろしい〃と大目玉を丁載したことがあります。そのために今でもミサ答えは満足に出来ない有様です。でもそれだけになつかしく関月の小神学校の校長をされていた頃には時々お訪ねもし、最近ではカトリック医師会の指導司祭とし

ていろいろと御指導を載いて今日に至っております。

このモラ神父様とメルシエ神父様が第二次欧州大戦の初め、出征のため御帰国と決まり、淋しい気持でお見送りしたのですが仏印（今のヴェトナム）迄いらして一月程で引き返していらしたときには本当に嬉しい気持でお迎えいたしました。

それと忘れられないのはビロー神父様のことです。はじめてお目にかゝったときは、もう大分お年を召して、耳も遠い御様子でしたが、よく病気の妹の所へ御見舞に来て下さり、その度に御菓子を子供達に分けて下さいました。そして私達に〝例え一銭を盗んでも泥棒じゃ〟と目をギョロつかせてお話になったことが妙に子供心に焼きつけられました。この神父様は又散歩がお好きで、小学校の帰り道に赤塚山や白鶴美術館の辺りで、長いマントをまとい、眼鏡をかけられて、聖務日課のお祈りをされながら歩いておられるのをよくお見掛けしました。戦後八十をすぎ長寿を全うされて、春日之墓地に葬られたときは本当に悲しい想いが致しました。

三十年の教会の歴史の中で唯一人の邦人司祭としていらしたのが西村神父様です。今でもそうですが、其頃から丸刈りで、とつても若くみえました、やさしくお話になり繊細な神経をもつておいでになり、終戦間近に海軍に入隊されたときには果して御身体が大丈夫かと心配いたしましたが、戦後間もなく復員で元気な姿をみせて下さった時は嬉しく存じました。

これらの神父様をはじめ今日のベロー神父様に至る迄、よい神父様に恵まれて

育つて来た私達信者は非常に幸福だつたといはねばなりません。

そして、その神父様方が今も尚お元気で日々宣教に御活躍なさつておられることは大変心強くもあり、又有難いことです。

まだまだ数多くの想い出があり、書き出せばきりのないことですので、子供の頃の想い思に止めました。

教会の門をはじめてくゞつてから三十年近くの才月が経ち、その間に有形無形にいろいろと影響をうけて今日迄育つて参りました。時が移り、はじめの頃の教会とは司祭館を残して、その外観は一変いたしましたが、あの頃の家庭的な雰囲気が今も尚うけつがれているのは喜ばしいことです。人間で三十才といへば壮年期です。今後益々住吉教会が発展することを祈りつゝ筆をおきます。

（昭和四十年十月十九日記）

（医学博士—国立呉病院）

司祭になる喜びを皆様と共に

和田幹男

住吉教会の皆様に、

本当に長い間御無沙汰致しました。デラ神父様より洗礼を受け、幼年時代を過したなつかしい住吉教会を想い出し、今皆様にお便りしようと思いたちました。

戦災で美しい聖堂を失い、まだ仮聖堂しかなかつた住吉教会を私が去つたのは十六年前でした。戦争中又戦後のとてもむづかしい時に、私はまだ小さな子供でしたが、住吉教会の神父様方や信者様方と共に数々の苦労を味い耐えしのんで来たことが今ではとてもなつかしく、その時代からもうこんな長い月日が経つてしまつたとは、ちよつと信じられない程です。今でも住吉教会を思出す毎に、本当に自分の故郷に思いをいたすような気持です。

実際私が生れ育つたのが住吉教会ですからそれも当然でしよう。カトリック新聞やカトリック時報で、最近聖パウロ三木館が出来たことなどを読み、住吉教会が布教の面でも益々発展していることを知り、とても嬉しく思つて居ります。現在の主任神父様はじめ神父様方、信者の皆様に心から拍手したい気持です。

さて、今皆様にこのお手紙を差上げようと思いついた動機は、数日後私にせまつているとても大きな喜びをお知らせしたかつたからです。住吉教会でデラ神父様、カスタニエ司教様、メルシエ神父様等々歴代の神父様方によつて、私の幼い心に植えつけられた司祭職召命への芽が成長して、神様の大きなお恵みの中に不肖の私が此の度司祭の位に上げられることになりました。かつていたずら小僧で教会の庭をあばれ廻つていた私を御存じの方々にはおどろきかも知れませんが、これがはかり知れず大きな神の慈悲深い御摂理であつたと考え、どうか喜んで下さい。ここまで来る間には、住吉教会の神父様方や多くの信者様方の数々の御指導、御支援のあつたことを思い心から感謝して居ります。特にこの八月十五日副助祭叙階に当りましては、毎日となえている聖務日禱書を、デラ神父様を通じて送つていたゞき、あらためてお礼申上げます。

只今私はローマのプロパガンダ神学校で勉強中で、この十二月十七日には二十二の布教国の凡そ六十名余りの神学生がローマの聖ペトロ大聖堂で、アガジャニアン枢機卿様より司祭に叙階されることになつており、その中、日本人は六名です。実は家族、親族、友人、知人、なつかしい皆様の御参列の中に司祭叙階の聖式を受けたい所ですが、ローマはあまりにも遠い空の下で、私もとても残念に思つています。どうか当日は住吉出身の司祭が生れると思い、この新司祭誕生を神に感謝し、その将来のためにお祈り

下さい。そして私と私の家族と共に心から喜んで下さい。

翌日の御ミサは六名の日本人新司祭が、イエズス会総長に選ばれたアルペ神父様と共に共同司式のミサを捧げることになつており、きつと私も皆様を思出し、皆様の為にお祈り致します。またその次の日には、ローマ郊内のチビタヴェッキアに日本二十六聖殉教者に捧げられた教会がありますので、そこに行つて特に日本の方々のため御ミサを捧げたいと思つています。住吉教会の保護の聖人を私の霊名として頂き、私も聖ポーロ三木には特別の信頼をもつておりますが、この聖人のおとりつぎによつて、日本にいる私のなつかしい方々の上に神の豊かな祝福を祈願したいと思つております。

尚来年の三月には同じく住吉教会出身の松本さん兄弟が司祭叙階を受けることになつて居りますが皆様と心を合せてそのためにもお祈りしたいと思つて居ります。

では皆様お元気で。

司祭叙階の日を待ちつゝ、ローマにて

十一月二十日

（元伝道士故和田実氏長男）

御影の教会で
オルガンを弾いた思い出

マドレ・マリア・セシリア
（本名　松葉福子）

十御聖体は讃美せられよかし

いつの間に三十年という年月が流れ去つてあの小さなお茶室のある風流な御影の日本家を教会として、少数の信者で家庭的に毎日曜日、メルシエ神父様のお捧げになる御ミサに与つて居りました思い出深い教会が、立派に成長して、住吉に近代的な建築の教会となり、今年三十周年をお迎えになつたことを心からお祝い申上げます。

当時は毎日の御ミサには、聖心会に入られたマザー進藤と私とミサ答えの男の人と三人しかあづかつていませんでしたが、聖人のようなメルシエ神父様は、ミサ後にはニコニコして私達二人を玄関まで見送つて下さつた事をまだ最近のように懐かしく思つています。

或る日神父様からピアノが弾けるならオルガンも弾ける筈だから、歌ミサのオルガンをひくようにと言われ、まだ一度もひいたことのないオルガンを、毎日教会に通つて泥縄式に練習して、どうにか八月十五日の被昇天祭の御ミサをすませた後で、神父様か

ら「よく出来ました」と喜ばれた時は、とても恥しい思いと共に従順の美しさを深く感じた事も今だに私の頭の中に残つて居ります。

又、今は助祭になられた松本錦治様も、その頃はまだ四才位で三人の小さなお姉様と御一緒にお母様につれられて御ミサに来られ、ミサ中いたずらをして皆を笑はせて居られた事も、その頃の家庭的な雰囲気の楽しい思出として記憶に残つて居ります。それから間もなく、進藤様も私も殆んど同時に修院に入りましたので、その後のことは全然わかりませんが、戦争中はどんなにか皆様御苦労なさつたことでしよう。しかし熱心な信者の方々がよく神父様と協力して、現在は立派なオルガニストもコーラス団もお出来になつていることでしようと、この三十年間の皆様の御努力の結果を心から御喜び申上げます。

七月からスペインの本部修道院に創立者帰天百年祭の式典に出席のため行つて居り、十月十五日帰りますと、留守中の仕事山積の所へ、この原稿の依頼に接し、落付かない上に、元来文才のない私にはとてもにがての注文でしたが昔お世話になつた教会に一言でもお祝いを申上げ度く、思つたまゝに急いでペンを走らせた次第でございます。

御熱心に教会のためにお働きになる神父様はじめ信者の皆様方と共に住吉教会が益々発展されますよう御聖体の御前でお祈り致します。

懐かしい住吉教会のご発展をお祈りしています

マリア・ソフィア 日比
（本名 日比花子）
（聖体礼拝会修女―豊中修道院にて）

十主の平安

雪を頂いた富士山の美しい姿が大船の丘の上から見られる季節になりました。

住吉の教会がもう三十年を迎えようという嬉しいお便りを頂き本当に夢のような気が致します。

あの御影の仮聖堂から住吉の焼けた聖堂、メルシエ神父様、モラ神父様、西村神父様そしてカスタニエ司教様……。信仰の恵みを頂き、更に修道生活の大きな恵みを受けることの出来たのも神様の計り知れない愛の御業と共に司教様、神父様方の暖かい指導とそれから人数は少なかつたが、家庭的な信者間のふれ合いの中で成長していつたのだと、つくづく懐かしく感謝して居ります。

私は立派に出来上つた今の聖堂は知らないので、聖ポーロ三木

の御絵の掛つた畳敷きの昔の聖堂しか想像できませんが、きつと昔と変らない住吉教会独得の暖かい人の交わりの教会と察して居ります。

私は現在、妹と二人同じ修院で、修道生活に召された幸福を感謝しつゝ、清泉女学院（聖心侍女修道会の経営による）中学、高校の千人余りの子供達のために働いて居ります。教育事業はとても大変ですが、心の清い若人の神に神への愛の種を植えつける尊い仕事に少しでも役立ちたいと思つて居ります。

四年前、ローマからの帰り、神戸港に船が寄つた時、モラ神父様、デラ神父様、西村神父様にお目にかゝる事が出来て大変嬉しうございました。そして昔と変らない六甲山のなだらかな山の姿と、見下ろす海の美しさになつかしい思いがいたしました。

ますます住吉教会が発展しますように、神の国が日本のすみずみまでも拡がりますように心からお祈り致します。

（聖心侍女修道院修女—鎌倉）

住吉教会
創立記念　豪華アルバム

創立二十五周年記念に際し作製しました豪華アルバムがあります。御希望の方は神父様に御申込み下さい。

価一〇〇円

王たるキリストの聖心の愛に於て

シスター。マリア。ピア
（本名　伊藤綾子）

十イエズス。キリスト賛美せられかし！

思いかけなくも、懐かしい教会からの御書面に接し、大変嬉しく存じました。神の御祝福豊かな御発展ぶり、今年三十周年のお祝いとの事、まことにおめでとうございます。

僅かの間ではございましたが私がお世話になりましたのは、もう十五、六年も前のことで、既にお年を召して居られたビロース神父様の身の廻りのお世話に何かと気を配つていらつしやつたデラ神父様は、当時まるでキリギリスのように痩せて居られたのを思い出します。ビロース神父様が「デラ神父さんはほんとうにいゝ人だよ…」とよく洩らして居られたと聞いては感激したものでございます。信者たちの間では大阪教区一の愛徳深い神父様と慕われて居られたのも懐かしい思出でございます。聖ヨゼフに対する信心を教えて下さつたのも神父さまの御蔭でした。水曜日の御ミサの後、降福祭があつて、しどろもどろでオルガンを弾かされたのを覚えて居ります。

神父様が半年の休暇でフランスにお帰りになつた後、あちらで大病にかゝられ、久しく日本にお帰りになりませんでしたが、その間に御摂理は私を当修道会にお召き下さり、二年前の一九六三年八月十二日聖クララの祝日に、無期誓願のお恵みを頂きました。不肖ではございますが、神の溢れるばかりの御恵の裡に、平安な喜びと感謝の日々を過させて頂いて居ります。

ゆつくりと何か書きたいのですが、学校の仕事に寧日なき有様で申訳ございません。

何時ぞやは、レジオ。マリエの方が私の家族を御訪問下さいまして深くお礼申上げます。

自分が得た信仰の喜びを、この世で最も愛する肉身の者と分つ事の出来ない事は年と共に、私の心に十字架の重荷を加えます。只神の限りない御憐れみに信頼を以てゆだねつゝ、日毎の小さな犠牲とお祈りを捧げて居ります。私が修院に参ります事に強く反対し、一時は「勘当をして行つてくれ」等と申していた父も、この頃ではむしろ好意をもつて見ようとしているようでございます。これも皆様のお祈りと御厚志の賜と存じます。でもまだ道は遠うございます。折にふれてお導き下さいますようにお願い申上げます。

末筆ながら住吉カトリック教会の皆様の上に神のお恵み豊けきを心からお祈り申上げます。

北海道に御旅行の節は是非お立寄り下さるようお待ち申上げて居ります。

（殉教者聖ゲオルギオのフランシス修道会会員―札幌）

皆様 おめでとうございます

マリアの聖心の
シスター。マリア。ベルナデッタ
（本名　木下鞠子）

十　願わくばイエズス。キリストの御受難と
聖母マリアの御悲しみの、常に我等の心にあらんことを……。

教会の発展のためにお励み下さいます皆様に心から感謝申上げます。不肖なる私、神様の御憐みにより十月十六日初誓願のお恵みを頂きました。三十周年を、お迎えになつた住吉教会の皆様におよろこびを申上げますと同時に何卒至らない私のためにもどうぞお祈り下さいませ。

（雲雀丘―御受難会修道院修女）

住吉教会出身の聖職者

（昭和十年創立より昭和四十年十二月迄）

氏名	修道名。霊名	所属修道会	現住所
岡野　利男	ヨゼフ	東京教区	ローマ
山田　経二		イエズス会	東京
坪内　弘吉	アキノのトマス	大阪教区	大阪
和田　幹男	ポーロ　三木	〃	ローマ
松本　錦治	フランシスコ。ザベリオ	〃　助祭	東京神学校
松本　三郎	トマス。モア。マリア	京都教区助祭	〃
村上　英子	マザー　村上	聖心会	コンゴ
進藤　徳子	マザー　進藤	〃	東京白金聖心
松葉　福子	マドレ。マリア　セシリア	聖体礼拝会	豊中修道院長
中村　文子	マザー　ルチア	聖霊会	東京都
俵　やす子	シスターマリア　ソフイア	マリアの宣教者フランシスコ会	熊本
日比　花子	シスターマリア　ルイサ	聖心侍女会	鎌倉市清泉女子学院
日比　章子	シスターマリア　ピア	〃	〃
伊藤　綾子		殉教者の聖ゲオルグフランシスコ会	札幌藤学園
中里　謹子	シスターコンチエプタ	カリタス会	東京
伊藤　昭子	ルース。マリア　ペルクマンス	クリスト。ヒア	
伊藤　鋭子	シスターメリー　アンゼラ	ノートルダム教育修道女会	
大西　房子	メール。マリア。エンマヌエル	マリアの宣教者フランシスコ会	ローマ
田島　絹子	メール。マリア。トウリニタス	〃	神戸海星学院
深山　厚子	マザー　深山	聖心会	小林聖心学院
木下　雛子	マリアの聖心のシスターマリア　ベルナデッタ	御受難会	雲雀丘
水島　洋子	スール。マリア　アルベルナ	マリアの修道会フランシスコ会	大船
土屋　吉正	フランシスコ　サベリオ	イエズス会	東京
土屋　路子	スール。マリア　アンチラ	煉獄援助姉妹会	台湾
遠藤とき子	シスター。マウラ	ノートルダム教育修道女会	京都

以上の他御家族が住吉教会所属の方

住吉教会のアクション活動

——各会の歴史と経過——

壮年の集りとしてのヨゼフ会の由来記

昭和十年創立の当時は信者の数は百二十名であつた。信者の一家の家長としての、又結婚して一家をなした男子信者達は、現在はヨゼフ会に入ることになつているが、当初は信者の数も少なかつたので、結婚未婚という区別をして集りをすることは困難であつた。働きの活潑なことから言うと青年たちの方が大きいのは言うまでもないが、而し地味ではあるが壮年者達も少しは教会事業に協力はした。勿論壮年会というハツキリした形をとつていたのではない。教会委員としては当時住友銀行神戸支店長だつた小高親氏と、それから近藤誠一さん（今は東京）、林耕造さんの三人が当つていたので、この三人を中心にして壮年者は働いた。なにか事がある時に主任神父の相談相手であり、又活動の手助けとなつていたのだつた。

戦争はこのようで極めて低調な動きしかなかつたが戦争中は一層人数は減つていてこれと言つたことは出来ていない。

たゞ戦後になつて世間が落ちついてくるにつれて、そして信者がふえてくるようになつて漸く少しづゝは神父の手伝いを行うことが出来るようになつた。

昭和二十六年になつて新進気鋭のベロー神父が主任となられるようになつて、当時の教会委員であつた柊源三、深山果、腰高輝次の三氏を招かれ、この三人を中心にして壮年会を結成し、神父を助けて教会の仕事に協力し、旁々信者全体の親睦を行つてほしいとの希望をのべられた。教会の発展のためにはぜひ信者の努力と協力が必要であつて、カトリックの盛んなヨーロッパの諸国、中でもフランスに於てはどこの教会でも、中心になるのは壮年信者であつて、経済的協力は勿論の事、あらゆる教会の、行事、事業に卒先して協力推進しているというお話であつた。住吉の信者もこれからはもつと活潑に働いてほしい、眠つてはいけないと、

大いに鞭撻されたので、三名の委員はベロー神父に従つて早速、男子壮年信者を狩り集め、第一回会合を司祭館にて開いた。これは昭和二十六年秋の事で、約十名の人が集まつている。その後定期的に集まつたわけではないが隔月か又は三四ヶ月目に一回位会合を開いたが、その頃に漸く会の名称を「ヨゼフ会」としようと衆議一決した。勿論これは一家の家長の集りだということから、聖家族の家長聖ヨゼフの名をいたゞいたのである。方針としては形式ばつたことは一切しないで、皆が文句なしに打ちとけ、仲よく、交際し、協力し合えるようにと、規則も作らず、組織も作らず、会長さえ作らず、皆が、自分が会長のつもりでやろうということになつた。たゞ食費だけは集めることになつて毎月三十円を拠出することにして、会計は柊源三氏にお願いすることにした。信者の親睦ということは又まことに大切なことであるので、ヨゼフ会では爾後毎年正月には新年会を開きスキ焼をつゝきながら語り合うことにしている。

教会の仕事に対する各方面に亘つてやつて来たが、就中幼稚園の創立、聖堂の新築、ルルド洞窟の設置、聖パウロ三木館の新築等には大いに尽力し、その都度拠金に当つては全員が交替にて毎日曜日の受付けを担当した。又信者全体の親睦のために、バスツアーを計画して、一回目は三田教会を経て立杭より東条湖へ、二回目はキリシタン遺蹟地高槻郊外千提寺村へと百名を超える信者の集団にて一日を楽しく過ごしている。又その外、幼稚園運動場にて信者の運動会を開いて、愉快な一日を過ごした際も計画、実行に蔭の力としてつくしている。

最初会員数は十数名だつたが、神父の指導よろしきを得、次第に会員も増加してその後は順調な発展をつゞけて今日に至つている。

婦人会の歴史

（あけの星会）

住吉教会の婦人会は、もう教会創立の時から始まつたといつてよい。若い方の集りもそうだが、教会でなにかせねばならないことがあると矢張り神父様は婦人会に相談、その手助けをうけられる。

初からハツキリと記録は残つていないのでくわしくはわからないが、昭和十年頃には大体輪郭は出来ていたといつてよい。その頃初代の会長さんに松本鞠子さん（現在東京）が選ばれて何かと婦人会の世話をして下さつた。その後の会の変遷と、その頃の会員や仕事を上げてみると次の様になる。

初代会長　松本鞠子　昭和十年頃より
二代　〃　山邑美重子　？
三代　〃　熊沢良　昭和十五年より十八年頃まで（今は故人）

四代会長　平山和江　会員数二十名

(1)聖堂掃除

(2)バザー。砂糖やお米など個別訪問をして集めた。

(3)信者の子供達に、クリスマスプレゼントとして、手造りの人形やお手玉などをあげる。

(4)米軍から毛布をいただいたので、毛糸で刺しうして祭壇の敷物を作った。

五代〃　腰高節子　デラー神父様が帰仏される一年前から、神父様が住吉に帰えられて一ケ月後まで。

(1)聖堂掃除

(2)バザーをした。砂糖、米など個別訪問をして集めた。

六代〃　柊君子　昭和二十九年四月～三十二年三月

(1)聖堂掃除

(2)バザー

七代〃　水島静　昭和三十二年四月～昭和三十六年三月　会員数百二十名　二〇円

(1)聖堂掃除

(2)バザー

(3)暁光会の労務者のふとんを一年がかりで造った。

(4)遠足

(5)黙想会

(6)新年会

(7)毎月一度例会

(8)神父様の霊名の祝日に、会員が一緒にゲームなどしてお祝いした。

(9)聖堂の花をルルドの庭に植えた。（花壇）

(10)司祭館のふとん作り。

八代〃　安田久代　昭和三十六年四月～昭和三十七年十月　一六八名　三〇円

(1)聖堂掃除

(2)バザー

(3)司祭方の歓送迎会、二十五周年祝賀等の準備、手つだい。

(4)日暉学校クリスマスパーテイの用意。復活祭玉子つくり。

(5)黙想会（ひばりケ丘にて）

(6)遠足（三田教会訪問）

(7)クリスマスプレゼントとして病人、老人へカレンダー、御絵など、又大阪、吹田の暁光会と託児所を訪問。

九代　佐野ふく　他七名　一九六三年四月から六五年四月まで。　一八〇名　三〇円

(1)会長制をなくし、八名の連絡係をつくつた。
(2)聖堂掃除
(3)新年会
(4)バザー、親睦、管理の三部をつくり活動。
(5)遠足（室津）
(6)三木館の建築がはじまり、棟上、落成、祝賀会など準備。
(7)黙想会（住吉教会にて）
(8)クリスマスプレゼント。古着を施設へ、病人、老人へ。
(9)赤ちゃんの受洗祝（記念品）をあげる。
(10)日曜学校クリスマスパーティ準備。
(11)バザー

十代　五十嵐喜世子　他七名　一九六五年五月より現在　一九四名　三〇円

(1)部を、バザー、管理の二部とした。
(2)聖堂、ルルド、聖パウロ三木館：掃除
(3)七月より毎月『婦人会便り』発行。
(4)毎月例会
(5)バザー　「予定」
(6)遠足（京都）
(7)クリスマスプレゼント
（老人、病人へ　古着を施設へ）　「予定」

住吉教会
青年運動の変遷

信者のアクションの一つとしての青年の運動、つまり青年会等の運動は創立当初からあつた。最初は信者の人数も少なかつたので、若い人たちも僅かで、大した動きもなかつたが、女子は姉妹会を作つて布教事業への奉仕、親睦などを行つており、又男子青年は聖歌隊を大きな仕事として、女子も混えて、教会事業へ協力をしていた。こんな状態が戦前戦後を通じて続くのであるが、或る時はまことに活潑な活動をした時代もあり、会員の人数の変遷と共にその運動も消長はあつた。その時代の記録がまことに乏しく詳細に知ることは出来ないが、主任司祭を助けて親々な仕事に努力した事は確かである。

戦後になつて教会の機関機「すみよし」が発行されるようにな

つてからは、漸くその活動の記録がそれに掲載されて明かになつているので、今これをまとめて、過去を顧りかへつてみることにした。

昭和二十七年二十八年の時代

二十七年六月、青年部が「すみよし」創刊、数ページの素末なガリ刷りであるが、ザラ紙の両面に印刷し、所々に赤を入れて二色刷りにする等立派なもの。しかも毎月発行していたのだから、先輩方の熱意が伺われる。

二十七年の初めに六年生を中心として結成された学生会というもの、潑剌とした働きぶりであつたらしい。教会の軒を借りてホリーショップを開設、「すみよし」十一月号で出したCMによると営業品目は、次の如し、

福音書、祈禱書、聖歌集、御絵

ロザリオ、メダイ、ヴエール

これでは大してゼニは取れまい、仕入れに行く交通費ほどの利益は計上していたのだろうが、儲かつたという話はどこにも記録として残つていない。

クリスマス、この頃も徹夜の親睦会があつたのは今と変らないが、「木炭を少々御持参下さい」、なぞという案内文を見ると、やつぱり一昔前の時代を感じる。今ならさしずめ「白灯油を一ピンづつ」というところか。

夜のプログラムから拾うと、若い人のグループは四つ

青年部、学生会、処女会、聖歌隊

どの会も遊ぶときに張り切るのは今も変らず。

二十八年、新年号によると「すみよし」編集担当の高橋秋男氏健康を害された由、本誌発行が無理を続けられたのか、本年も毎月立派な内容で発行をみる。

学生会ではホリーショップに加えて、信仰図書の斡旋と貸出業務を営む。現在、表紙カバーの黄色くなつた本が神父館玄関脇に並んでいるが、あれがその遺物であると聞き及んでいる。青年部とともに活潑な働きを展開していたらしく、処女会と婦人会の有名無実な沈滞ぶりを誌上で指摘している。

六月号。教会資金の一助にと、信者の協力をいただいて、廃品回収を行なう。古鉄、空罐、空ビン、鎮鍮、ボロ、古新聞雑誌、ガラス屑その他いろいろ集めて、

計三千九百二十九円六〇銭也の収益。

二十七年十一月号から二十八年の夏頃迄、凸ちやんこと、和田英男神学生の渡欧記が連載されて、若い人々の信仰心を鼓舞した。「ラ。マルセイーズ号」の四等船客は、荷物を友として、食器洗いまでするという完全セルフサービス。しかし、天与の楽天、明朗さに加えて、旺盛な生活力にものいわせて、素晴しい船旅を続

け、寄港の都度、ユーモラスな航海記を送っています。

ＪＯＣ華やかなりし頃　（前田耕治氏）

昭和二十九年～昭和三十四年

当教会に初めてＪＯＣが結成されたのは昭和二十九年の暮であつた。発足に先だち、ＪＯＣの東京本部、総書記局から指導員が派遣されて、しばらくは教育と組織化の準備期間があり、当初のメンバーは、倉本（会長）、酒井、坂田、浜本、林、森、前田の七名であつた。これよりＳ三四までの歴代会長は倉本―森―松本―前田といつた顔ぶれで、会員（斗士と呼ばれる）は五名乃至八名であつた。

今ほどオツムの白くなかつたベロー神父様の下で、文字どおりその手足として教会のために活動を続けたのであるが、神父様がいつも口にしておられたところのＪＯＣの行動理念（綱領というべきか）は今でもよく憶えている。

一、いつでも、どこでも、何事によらず全てに対して完全な努力をせよ。

二、あかりを燈して燭台の上に置き、人々の前で光を輝かせよ　―　マテオ五章　―　君達もこうありなさい。

三、失敗をおそれるな。

ベロー神父様の指導は「しごき」とも云えるほどに厳しいものであつたが吾々は、よく従つて行つた。また会員同志も、青年らしい信仰心で結ばれて、度々の苦難にもよく耐えて行つた。殊にＳ三〇年からＳ三三年にかけての全盛期には、斗士は全青春をＪＯＣに捧げていたといつてもいいだろう。一週間毎晩つづけて教会に来たことも一度ならずあつたが、それは遊びや、単なる聖体訪問ではなく毎晩何かの仕事をしていたのである。

もつともあの頃は遊ぶことより、教会の仕事をやる事の方が楽しくもあり喜びでもあつた。

（「すみよし」にも、毎号、ＪＯＣの活動記録と宣伝が載っているが、素晴らしい働きぶりであつた由、これは、東神戸の一角に咲いたカトリックアクションの華であり、当教会史に特筆さるべき一時代である。）

主な活動としては次の二つが挙げられる。

一、聖書研究会　週一回

各々の職場に灯をともす信仰の源泉として、或いは、行動の理論的な背景として、最も重要なものであり、毎回真剣な研究が重ねられた。

二、ＪＯＣ機関紙「新世界」の街頭販売

教会はいつも、可能な全ての方法で、その地域社会に呼びかけ

ることを続けなければならない。

春夏秋冬と年四回、主として省線住吉駅と本山駅の前で夜七時から九時迄、「新世界」を売つた。（配つたのではなく、売つたのである。）そのエピソードを二つ。

或る寒い寒い冬の夜、唯の一枚も売れない。ヤケクソになつてタダで配布し始めたが、吹きすさぶ寒風の中、誰一人としてポケットから手を出して受け取ろうとはしない。何とも云えぬ気持になりました。

またある時は、売りつけた相手が悪かつた。話しの好きな酔つぱらいにからまれて、酒屋にひつぱり込まれ、一緒に飲みながら話し込んだこともあつた。

三、レコードコンサート　月一回

対象は未信者の青年

先ず案内のチラシを印刷して機関紙を売る時に一緒に配り、電柱にもポスターを貼る。

会場には神父館を使い、当日はプログラムも印刷して配り、ベロー神父様の解説も混え、なかなか好評であつた。曲目はクラシック、特に宗教音楽が多かつた。毎回平均すると二〇名程度の参会者があり、未信者の方が多い事も少なくなかつた。S三〇年暮からS三四年春まで連続四〇回の開催を見（一度も休まなかつた）直接の成果としては二名の入信があり、公教要理を始めた人はかなり居た。

その他、結婚式や被露会の世話、ミサ、聖歌隊等の通常の務めを始め、バザー、運動会、遠足、等の行事では中心になつて働き暴れたものである。S三二、S三三と二回行なわれた運動会では楽しい思い出がつきない。

また、併設された、幼稚園に対しても教会との一体感に立ち、出来る限り手伝いをさせていただいたし、先生方とも、なごやかな交際があり、よくお菓子をねだつたりした。先生の部屋を訪ねると、不思議といつもお菓子があつたものである。

ＪＯＣ会員を含めて青年会というものはあつたが、活動の主流は常にＪＯＣであつた。あの時代の特長として、特に思い出されることは、大学生とＪＯＣの間が実にうまく連絡を保ち、よく協力し合つていたことで、当時、近くの他の教会には例を見ない美点であつたと思う。

三四、三五、三六年と、次々に斗士が結婚し、時間的な制約から活動に参加出来なくなつた。更にその空洞を埋める新しい斗士となる年令層が少なかつたということもあり、ついでに、住吉組合は自然消滅やむなきに至つたものでありました。

ＪＯＣとは何か ― 「すみよし」一七号より

会　員 ― 動いている青年男子

会の性格 ― あらゆる所でキリストの代理者として行動する為に研究し、団結し、力を得る。カトリックアクション団体である。

主な行事 ― 研究会は毎週、聖書研究会を始め、実際生活での話し合い。その他、時に応じ、レコードコンサート、ピクニック等を催す。

集会の日 ― 毎週水曜日午后八時より。

ＪＯＣの危機　（塩野文三氏）

昭和三十七年―昭和三十九年

一、経　過

三六、三七年頃は、森、佐野、塚原といった方々が、中心になって動いていたように憶えている。当時は、結婚の近い会員が多く、新会員募集の看板を掲げる放しであった。私も後継者の一人と目されたのか、度々勧誘を受けたが、まだその頃は無関心青年層に属していて、なかなか誘いに乗らなかったものです。

（三七年は年間八組の結婚式があり、ＪＯＣのみならず聖歌隊に於ても、隊員不足をかこち、その新規獲得のため指導者の涙ぐましい努力が続いた。）

それにＪＯＣの活動もあまりパッとしなかったようです。三七年の「すみよし」クリスマス号によると。

「今年の住吉のＪＯＣは何をしたか？この質問には答は簡単で『寝ていました』と答えるより外ない。ピクニックに二度ほど行った他は、冬眠、春眠、夏眠を続け、やっと秋になって『もうおきようか。腹がへった』と感じ始め、大きなあくびをしたところが今のＪＯＣの状態。これから少し研究会を続けて栄養をとり、来年からは元気に動く決心をたてている」というところです。

この年の秋、誘われてピクニックに行ったとき、中山手から転入してきた杉岡さんと初対面があった。

（このピクニックは九月十六日。女性群は名コックぶりを発揮して、どこのクッキスグスクールでも教えてくれない「砂糖入りカレーライス」を作ったとか作らなかったとか）

彼は熱心な人で、森会長の後を継いでＪＯＣを復活させた。今は芦屋に住んでいる。彼のリードで聖書研究会が再開されたが、それは、聖書を読まぬ吾々に対する、ペロー神父様の慈愛深い心づかいによるものでもあった。テキストはＪＯＣの出版物を使い、この中の聖句を中心にして話し合い、研究を重ねて行った。

（世は無責任時代、「私はウソは申しません」の風潮にめげず、住吉教会では若い力の抬頭が始まった。彼等はツイスト

で元気づいたのか？）

三八年の新年会は、住吉に来られて間もないコーナン神父様を交え、参会者は男女三〇名を越す盛会であつた。この時のにぎやかさは今でも印象に残つている。更に三月には、六甲山へハイキングを行なつた。この時もコーナン神父様が御一緒だつた。

（三月にはデラー神父様フランスへ、三月一七日には田口司教様を迎えて堅振式が行なわれ、七二名のキリストの兵士が誕生した。

また司教座聖堂の献堂式が行なわれたのも三月の事であり、ＪＯＣ神戸地連も結成された。）

三八年六月の第一日曜日には一〇名余の集会で男子青年会を久しぶりに再発足させ、多くの決議を採択しました。詳細は「すみよし」の被昇天祭号がありますが、それらの実行成果を思い出すと

a　被昇天祭のつとめは計画どおり完遂。

b　バザーでは金魚すくいその他で奮斗。

c　ピクニックは計画どおり山へ登つた。

d　クリスマスには居なかつたが、盛会であつたと聞く。

e　聖歌隊への積極的参加については。思いの外、全員が音痴であつたので果せなかつた。

f　研究会の記録を毎月まとめて、配布する件は、最初一回きりだつたと思います。

この頃も研究会は細々と続き、結局三七年秋から三九年春まで継続したことになる。杉岡会長以下、五十嵐、鶴谷、永田というところが常連であつた。新しい会員を得るために常に勧誘を続けてはいたが、一向に来てくれず、稀に来ても二。三回で止めてしまう人が多かつた。吾々の呼びかけがまずかつたのか、或いは研究会に魅力が無かつたからだと思つている。

（この頃は若い人でも驚くような事件が多すぎた、吉展ちゃん事件、国鉄鶴見駅二重衝突事件、三池三川鉱爆発事件、ケネディ大統領暗殺事件ＥＴＣ）

三八年暮から、皆の足許が危くなり、三九年に入ると、杉岡（一。一五）五十嵐（五。三）私（五。一〇）とバタバタ結婚してしまつた。神父様もさぞ頭のお痛いことでしたろう。

（常陸宮御夫妻に続け!!）

二、振り返つてみて

ＪＯＣで活動したのは、わずか一年半程であるが、この期間を振り返つてみると、ＪＯＣは

「あるためにあつた」

という表現が適切であると思う。外部的な働きもなく、中で集まつたものだけでなんとなくやつていたのは、無くなると困るから

やっていたのだ。とはいうものの、このような「あり方」でも意味が無い訳ではなかったと思う。特に唯一の活動として続けていた聖書研究会は私自身、大変益するところが多かったと信じている。一週一度とはいえ、片道一時間半の勤め先へ毎日八時に出勤している身にとって、夜の研究会は決して楽なものではなかった。

社会で働き始めると、労働組合、宗教や思想の問題、恋愛、その他いろいろのことが無秩序に入って来る。それは学生時代の様に予め選択されたものを系統的に与えられるものではないから。自分の考え方の中心を何に求めたらよいのか解らなくなってしまうのである。このような時、同じ境遇に置かれている青年達が話し合える場があるかないかが大きな問題である。実際に、聖書の研究をするということで或る程度、その中心というものが出来たし、聖書を毎日読むという習慣も着いた。会社の机の中にいつも聖書を一冊入れてあるが、仕事の始めには一章程度読む。読み流すこともあるが、その聖句についてよく考えることもある。

研究テーマというより話題の中心として、よく結婚問題、つまり、信者の結婚では何を第一に考えねばならないかということを具体的に取り上げた。皆が適令期であったから当然かも知れない。五十嵐君も私も相手が未だ信者ではなかったので、この事については、ベロー神父様から、いろいろお話を伺ったが、二人とも、相手を信者にするつもりであるから絶対大丈夫だ、といって、がんばったものでした。

カトリックという言葉

今日ではわれわれの教会はどこへ行っても「カトリック教会」と言われている。三十年前はそうではなく、皆「天主公教会」と称していた。これは支那から来た名称で、今でも古い教会の石の門などにこれが彫り込んである所を見ることがある。宗教としての名称の変遷をみると、先づ最初は、切支丹宗、ヤソ教、天主教、公教など。世間では又俗に新教に対して「旧教」とも言っている。それから第二次大戦後になって「カトリック」が一般化して来た。又聖堂も、大昔は南蛮寺といわれた時代がある。明治になってからは「天主堂」となった。京都河原町の聖堂の正面には今でもこれが大きく書かれている。「天主」は「デウス」（神）というラテン語がなまって出来たのだ。聖堂の呼び方にも昔からの習慣があって、「聖堂」「御堂」と書くが、「みどう」と読むのが普通で、丁寧には「おみどう」と言って、決して「ごみどう」とはいわない。又「ミサ」の場合はこれと反対に「おミサ」とはいわない。必ず「ごミサ」と言うのが慣習で、切支丹遺物の中でもこう示されている。

レジオ・マリエの歴史

平和の元后のプレシディウム

私達レジオ・マリエの仕事は昭和三十二年六月発足以来、日曜学校を主に、それに関連した月1度のマリア会、及び紙芝居の下絵ぬり絵、病人の訪問などがあり、他に教会の行事の準備とか、聖歌隊への参加など数多くあります。賛助会員の皆様の熱心なお祈りを藤にいたゞき、10余名の青年女子活動会員が週1回の集いをもつて、神父様の指導のもとに日々活躍いたしております。

下表は発足以来7年間の活動状況を簡単にまとめたものです。

期間	活動会員数	賛助会員数	役員				会員出席率	主な仕事	子供数
			会長	副会長	書記	会計			
1957.6〜1958.5	7名	18名	寺西	久下	阪下	高橋	%	日曜学校	
1958.6〜1959.5	10	18	〃	高橋	酒井	安楽城	81	日曜学校、聖霊のお祝会 キャンプ参加、子供ミサ	70
1959.6〜1960.3	11	18	〃	〃	〃	〃	62	〃 〃 〃 〃	70
1960.4〜1961.6	11	18	〃	〃	〃	〃	65	〃 〃 〃 〃	70
1961.7〜1962.6	12	20	〃	〃	安楽城	阪下	65	〃 〃 〃 〃	65
1962.7〜1963.8	?		高橋	酒井		〃	68	〃 〃 〃 〃	
1963.9〜1964.8	10	21	酒井	今井	原田	古川	70	マリア会、キャンプ参加	37
1964.9〜1965.9	9	21	原田	古川	千足	五十嵐	72	日曜学校、マリア会	40

教者の元后のプレシデイウム 創立以来の活動状況

（創立昭和三十二年六月）

年度月	指導司祭	活動会員数	賛助会員数	訪問	見舞	要理 補足、誘導	隣組、ロザリオ会案内すみよし、教会の手紙配達	催事の手伝 色々な会クリスマス バザー等	図書整理 貸出し	プリント通信 連絡	名簿の仕事 レポート	翻訳 司祭の手伝	裁縫 大掃除 片付 洗濯
昭和三十二年	メルシエ師	14 10	5	52回	20回	26回	となり組9回	9回	回	9回	19回	1回	21回
昭和三十三年	メルシエ師	9 10	5	68	47	41	20	22		10	8	18	10
昭和三十四年	メルシエ師 デラー師	13	6	142	57	45	9	12	6	7	10	25	13
昭和三十五年	デラー師 メルシエ師	12	7	99	36	79	56	21		11	7	29	38
昭和三十六年	メルシエ師 デラー師	11	19	87	30	107	31	15	17	8	5	9	5
昭和三十七年	デラー師	9	23	68	13	146	75	23	31	11	3	2	21
昭和三十八年	デラー師 ペロー師	10	27	88	44	86	31	15	2	5	3	3	10
昭和三十九年	デラー師	11	31	110	38	42	手紙、すみよし 100	4	16	25	3	50	11
昭和四十年	デラー師	11	38	26	27	3	173	23	15	50		2	4

編輯のあとに

▽　三十周年記念号はまことに発行がおくれて申しわけありません。住吉教会が創立されたのは昭和十年五月五日に御影に仮教会がつくられた時に初まったわけですので今年の五月五日に発行すべき筈でした。いろいろな企画や相談やに手取ったのと、編輯子の都合などが重なってこの仕儀となりました。最初の考えでは二十五周年の時に出版したように、「すみよし」とは別個に一つの出版物としたいとの事だったのですが編輯スタッフが「すみよし」と同じスタッフなのと経費の点で、つい「すみよし」特集号となった次第です。このため少し変りばえのせぬものに出来上って申しわけなく思っています。

▽　それでも原稿は古い信者の方を中心に御依頼申しました所、まことに御協力下さいまして実に沢山いたゞきました。各時代の主任神父様にも御協力下さいました事は幸せです。

▽　内容は住吉教会の歴史をまとめることに重点をおきまして、住吉教会の年譜、それから「昔を語る」座談会を主とし、それに腰高氏の「神戸カトリック教会小史」を加え、改めて住吉教会が生れるまでの、神戸に於けるカトリック教会の歴史を掲載することになりました。近来の新しい信者のために神戸の教会歴史を知っていたゞくために大変よい読物だと存じますのでぜひ一読下さい。

▽　その中で住吉教会信者にとってビッグニュースとなることが記されています。それは二十六聖人が歩いた西国街道が、実に住吉教会の北側の道だったということです。今まで旧国道だと信ぜられていたのにくらべてあまりにも近かったその道でした。聖パウロ三木聖人に対して改めて感謝の祈りをしたいと思います。この道を私達はいつも大切に思い出したいものです。

▽　住吉教会は今では聖パウロ三木館が完成しましたので教会としてはこれで凡ての設備のととのった教会となりました。主任神父様の御努力と、信者の皆様の尽力によるものと同慶に堪えません。この上の望みは信者の数がもっともっと増えることです。お互に一層の努力を誓いましょう。この後四十周年、五十周年の祝賀の出来る時がたのしみです。

▽　三十周年記念の本号は、いつもの「すみよし」とちがった意味がありますので、どうぞ皆さん、大切に保存して、いつまでも残しておいて下さい。

編輯委員

ヨゼフ会　腰高輝次
　　浅井敏正
婦人会　五十嵐喜世子
　　安田久代
青年会　渡辺武徳
レジオ　古川裕子
　　原田すさ子

昭和四十年十二月二十三日発行
教会機関誌「すみよし」第三十八号
三十周年記念特集号
発行所　神戸市東灘区住吉町泉一番地
住吉カトリック教会
「すみよし」編輯部
価　一〇〇円

持出禁止
〒 神戸市東灘区住吉宮町2丁目18-32
カトリック住吉教会